

## 岡田2号墳

1989. 3

兵庫県教育委員会

## 序 文

本書は昭和62年に発掘調査を実施した岡田2号墳の報告書である。岡田2号墳は、昭和42年度実施の県営ほ場整備から地区除外を受け、保存されていた岡田古墳群の一つである。岡田古墳群は県指定史跡、前方後円墳小丸山古墳を含め、前方後円墳2基、円墳3基で形成されており、但馬地方でも特異な存在であった。

昭和62年、兵庫県土木部八鹿土木事務所が計画した県道金浦和田山線道路改良工事に伴い、兵庫県教育委員会が岡田2号墳の発掘調査を行った。墳丘裾の周濠内から埴輪を発見し、墳丘積み土の状況を一部把握した。さらに、下層に弥生時代の住居跡が部分的に発見されたものである。

道路改良にあたっては、墳丘を保護する工法にて施行されている。今後とも文化財保護にご理解を戴き、岡田古墳群の保存を願うものであります。

平成元年3月

兵庫県教育委員会

教育長 井 野 辰 男

## 例　　言

1. 本書は兵庫県朝来郡和田山町岡田字兜塚に所在する岡田2号墳の発掘調査報告書である。昭和62年夏に県道金浦和田山線道路改良に先立って発掘調査を実施したものである。調査は兵庫県教育委員会が、昭和62年6月に第1次調査、9月に第2次調査を実施し、社会教育・文化財課 埋蔵文化財調査係 岡崎正雄、村上賢治が担当した。
2. 発掘調査においては、和田山町教育委員会 社会教育係 稲井保雄係長、朝来郡広域行政事務組合 田畠 基氏には、多大な援助と協力を戴いたことを明記する。
3. 本書の刊行に際しては、昭和63年度に兵庫県埋蔵文化財調査事務所において整理事業を行ったものである。
4. 遺物の実測は表具洋子・中島雄二・岡崎が担当し、拓本は中田明美、清図は各執筆者が担当した。なお、石器の実測・清図については森山恭子の協力を得た。
5. 遺物番号は分類にしたがって、弥生土器をA、土師器をB、須恵器をC、黒色土器をD、埴輪をE、石器をFとし、数字で個体色別を行った。
6. 本書の執筆者及び執筆分担は以下の通りである。  
岡崎正雄 第1章、第2章・1、第3章・1 (1・2)・2 (1・2)・3 (3)、第4章・5  
村上賢治 第3章・1 (3・4)・2 (3・4)・3 (1・2) 第4章・1・2  
田畠 基 第2章・2  
水嶋正稔 第3章・3 (4)  
中島雄二 第4章・3
- なお、第4章・4埴輪の胎土の化学的分析について、武庫川女子大学薬学部 安田博幸教授・森 眞由美助手から玉稿を戴き掲載している。また、石器の石材同定は、神戸大学教養部 後藤博彌教授に分析戴いた。
7. 写真撮影は遺構については調査員が行い、遺物については森 昭氏に依頼した。
8. なお、図集は岡崎が行い、その責任がある。
9. 参考遺物として、岡田地区在住の山本多津子、和田作太郎両氏から岡田地区内の出土品を拝借し、本報告に掲載致しました。ここに、感謝を申し上げる。
10. 最後に、南但馬地域の埴輪については、朝来郡広域行政事務組合、和田山町教育委員会、山東町教育委員会、朝来町教育委員会、養父町教育委員会の各機関ならびに関係各位にお世話になり、深く感謝の意を表す。

兵庫県文化財調査報告書 第68冊  
 「畠田2号墳」正誤表

頁	行	誤	正
8	1	第2章	第2節
11	7	特徵的に	特徴的な
11	33	三町古墳	三町田古墳
15	11	豎穴住居跡	豎穴住居跡
19	6	柱跡	柱穴
23	15	柱跡	柱穴
33	13	次期	時期
34	7	脚裾部外面	脚裾部内面
40	掲区31	(1/25,000)	(1/100,000)

## 目 次

第1章 調査の経緯 .....	1
第1節 小丸山古墳の保存 .....	1
第2節 岡田古墳群の測量調査 .....	1
第3節 岡田2号墳の調査 .....	2
第2章 遺跡の環境 .....	5
第1節 地理的環境 .....	5
第2節 歴史的環境 .....	8
第3章 遺跡の調査 .....	13
第1節 第1次調査 .....	13
1 調査の方法 .....	13
2 調査日誌 .....	13
3 土層 .....	15
4 遺構・遺物 .....	18
第2節 第2次調査 .....	20
1 調査の方法 .....	20
2 調査日誌 .....	20
3 土層 .....	20
4 遺構・遺物 .....	23
第3節 遺物 .....	24
1 弥生土器 .....	24
2 石器 .....	27
3 墓輪 .....	27
4 古墳時代及び平安時代の土器 .....	33
第4章 ま と め .....	36
第1節 弥生時代の住居跡復原 .....	36

第2節 岡田2号墳の復原	37
第3節 南但馬地域における埴輪文化の伝播	39
第4節 兵庫県朝来郡および養父郡の古墳から出土した埴輪の胎土の化学分析	46
第5節 岡田古墳群について	53

## 図 版 目 次

- 図版1 東河地域と岡田古墳群
- 図版2 岡田古墳群と岡田2号墳
- 図版3 岡田2号墳 遠近景写真
- 図版4 調査前の墳丘の状況
- 図版5 第1次調査トレンチ
- 図版6 墳丘上層断面
- 図版7 弁生時代住居跡
- 図版8 第2次調査トレンチ
- 図版9 土 層
- 図版10 古墳の周溝
- 図版11 弁生土器
- 図版12 弁生土器・石器
- 図版13 古墳時代・平安時代の土器
- 図版14 墓輪1 円筒埴輪
- 図版15 墓輪2 円筒埴輪
- 図版16 墓輪3 朝顔形埴輪・円筒埴輪
- 図版17 墓輪4 円筒埴輪(口縁部)
- 図版18 墓輪5 円筒埴輪(底部)
- 図版19 円筒埴輪と周辺の埴輪
- 図版20 墓輪7 細部

## 挿 図 目 次

- 挿図1 岡田2号墳位置図 iv

挿図2	岡田地区出土石軒	1
挿図3	岡田古墳群の位置	2
挿図4	調査地区位置図	3
挿図5	岡田古墳群と復原地形図	6
挿図6	岡田地区字限図	7
挿図7	和田山町内の主要道路	10
挿図8	第1次調査の位置図	14
挿図9	第2トレンチ土層断面図	16
挿図10	第1トレンチ土層断面図	16
挿図11	土層断面図	17
挿図12	第5トレンチ土層断面図	18
挿図13	遺構図	18
挿図14	弥生時代の住居跡平面図	19
挿図15	弥生時代の住居跡断面図	19
挿図16	第2次調査の位置図	21
挿図17	土層断面図	22
挿図18	周濠平面図	23
挿図19	周濠内埋土	23
挿図20	弥生土器	25
挿図21	石斧	26
挿図22	長塚古墳出土の円筒埴輪	28
挿図23	岡田2号墳出土埴輪(1)	29
挿図24	岡田2号墳出土埴輪(2)	30
挿図25	岡田2号墳出土埴輪(3)	31
挿図26	岡田2号墳出土埴輪(4)	32
挿図27	古墳時代及び平安時代の土器	35
挿図28	弥生時代の復原住居跡	36
挿図29	岡田2号墳埴丘復原(1)	37
挿図30	岡田2号墳埴丘復原(2)	38
挿図31	南但馬地域における埴輪出土古墳位置図	40
挿図32	南但馬地域の埴輪(1)	42
挿図33	南但馬地域の埴輪(2)	44
挿図34	岡田古墳群の埴丘	54

## 表 目 次

第1表 南但馬地方古墳出土の埴輪資料および分析値一覧表	48・49
第2表 墓輪胎土の $Al_2O_3\%$ —酸不溶性成分%のグラフ	50
第3表 岡田古墳群一覧表	52・53



図1 岡田2号墳位置図(1/50,000)「但馬竹田」、「出石」

# 第1章 調査の経緯

## 第1章 小丸山古墳の保存

昭和45年4月、朝来郡和田山町岡田において土取り工事中、箱式石棺や6世紀後半の須恵器窯<sup>1)</sup>などが発見される中、小丸山(挿図3-4)古墳の所在する丘陵裾部においても土取りが進行しているため、和田山町教育委員会は、地区代表者に工事中止を依頼するとともに、県教育委員会文化課に現地立会を求めた。現地立会の結果、地区代表者に古墳の保存を要望するとともに、7月には古墳地形の測量調査を実施した。小独立丘陵上の全長約59mの前方後円墳で、くびれ部が長く、後円部に比して前方部が約30cm高い形状をもち、円筒埴輪が存在することがわかり、時期は6世紀前半～中頃に比定された<sup>2)</sup>。

その結果、土取りされた箇所の崩壊などの問題は残るが、地元で古墳を保存することについて理解がなされた。

昭和48年度には、史跡として県指定を受けた。単年ではあるが、花と緑で文化財を守る事業も行われ、現在、岡田部落では、さくらの苗木を植え、部落の行事として小丸山古墳の草刈りを毎年行い、文化財保護の啓蒙を実践されている。

## 第2節 岡田古墳群の測量調査

小丸山古墳の測量調査を終えてのち、但馬の古墳の測量調査をテーマに研究をされている、武庫川女子大学考古学研究会により、小丸山古墳を除く岡田古墳群の地形測量が昭和45年8月と昭和46年4月に行われ、全長70m「前方後円墳」長塚古墳(3)と直径35m「最大の円墳」青塚古墳(2)と直径28m「中型円墳」岡田1号墳(5)と「最小円墳」岡田2号墳(1)と名付けられ、昭和49年7月には測量報告が発表された<sup>3)</sup>。

岡田地区での文化財保存への理解と、汗まみれの女子大生たちの文化財保存への基礎的作業、測量調査を通じて、岡田古墳群は但馬では唯一の大型古墳が集中する地



挿図2 岡田地区出土石器

域として脚光をあびることになった。

### 第3節 岡田古墳群の調査

『最小円墳』とされた岡田2号墳は、昭和42年度、県営は場整備事業東河工区（野村・岡田）が実施され、工事から除外されたものの墳丘の形状は変わってしまっていると理解される。県道及び、他のは場区画割で、旧地形が復原できにくくなってしまっていた。

岡田2号墳は、約16mの墳形を残すのみで円墳または方墳とされるが、旧地形の変容が著しく古墳の形状は不明なものであった。

は場整備事業実施から20年の歳月を経て、地元の要望により、岡田2号墳の北に隣接する県道の改良工事が計画されることとなった。昭和62年5月6日付け共済組合八鹿土木事務所の依頼文書に「①現農道の有効な利用と地元の個人負担の平等と軽減を計る、②両側の道路拡幅案で地元の同意を得ている、③用地買収もほとんど終わっており」とあるように、岡田2号墳は、詳細な資料がないため、計画を変更することは無理となり、調査を行うこととなった。立会いを行い現地での調査は現在の墳形に抵触する拡幅部分について、とりあえず、トレンチ調査を行うこととして、片側のみ対象として第1次調査を昭和62年6月2日から6月6日まで行った。その結果、トレンチの断面の一部に古墳の積み土の状況が理解でき、古墳時代の土器（土師器、須恵器）を認めた。ただ、近世以降の畑地化で破壊されていることもわかった。墳丘の下層について、調べていくと、褐色礫混シルト地山面に弥生時代の石器や土器とともに、円形住居跡の周溝や柱穴が検出された。

のことより、①墳丘については、これ以上の破壊を進行させないような工法をとること、②もう一方の拡幅部分についても、昭和42年度のは場整備事業で構築・墳丘が壊されているとしても、下層の弥生時代の遺構は盛土の中で保存されている可能性が高く、現道部分についても同様なことが考えられるため、工事着工にあたっては、立会いを行い、再度の調査が必要かどうか判断することにしたい旨、申し入れた。

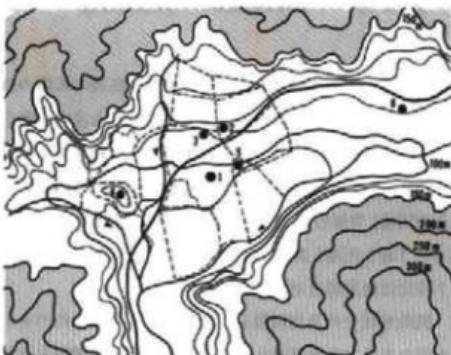


図3 岡田古墳群の位置

墳丘の保存については、法面をカットすることなく矢板を打ち込む工法にて対処してもらったが、立会いについては、時間的なズレを生じてしまい、9月になって、工事着工部分で土層断面などに埴輪や土器の包含層や柱穴などの遺構を認めた部分について工事を止めて、第2次調査を実施した。その結果、岡田2号墳の削平された周濠が埴輪などとともに発見された。

調査は湧水のため、困難をきわめたがなんとか調査を終了し、現地で簡易な地元民への説明会を行い、工事を再開して記録保存となった。

#### 註

- 1) 岡田箱式石棺、岡田1号窓と遺跡名称を与えられている。
- 2) 楠木誠一他「城の山・池田古墳」1972年、和田山町教育委員会に小丸山古墳の保存への経過が詳述されている。
- 3) 安田博幸他「但馬の古墳II 岡田古墳群の測量調査」1974年、武庫川女子大学考古学研究会

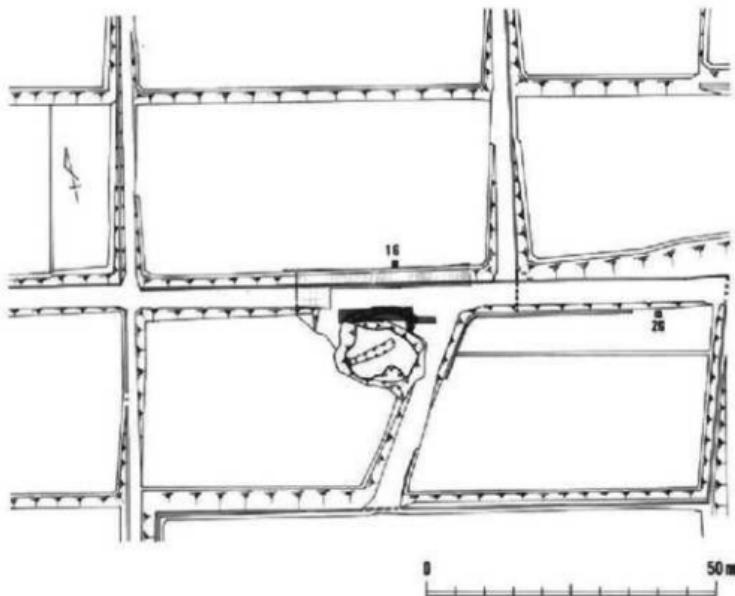


図4 調査地区位置図

## 調査の組織

発注者 兵庫県土木部八鹿土木事務所

工務第1課

事業名 公共事業 特殊改良第1種工事

県道金浦和田山線改良工事

## 発掘調査の体制

事業主体 兵庫県教育委員会

調査主体 兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課

調査員 社会教育・文化財課 埋蔵文化財調査係

主　　査　岡崎正雄

技術職員　村上賢治

調査補助員　水嶋正徳、中島雄二（関西大学）

調査協力 和田山町教育委員会　社会教育係長　藤井保雄

朝来都庁城行政事務組合　田畠　基

作業員 足立克郎、島野喜代司、野川一馬、柏村秀雄、吉田忠夫、並川藤一郎、

並川信次、松本健治、藤山正雄、三坂孝一、足立　薰、足立順作

## 整理作業の体制

兵庫県教育委員会　社会教育・文化財課

（兵庫県埋蔵文化財調査事務所にて整理作業を実施する。）

調査員 主　　査　岡崎正雄

技術職員　村上賢治

調査補助員　表具洋子、植田勝生、中田明美、松本美千代、中澤貴美子、和田マユミ

村上貴子、森山恭子

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 地理的環境

岡田古墳群の所在する朝来郡和田山町は、旧養父郡糸井村・大藏村及び旧朝来郡和田山町・東河村・竹田町を含み、昭和30年3月に旧和田山町と東河村が合併し、更に昭和31年9月に南但町・和田山町・竹田町が合併して、現在の和田山町が誕生した<sup>1)</sup>。岡田古墳群は朝来郡和田山町大字岡田に位置する。

平安時代「和名類聚」によると但馬国朝来郡東河郷40町4反40歩の記載がある地域の一部にあたり、条里制が復原される地域である<sup>2)</sup>。

また、兵庫県森林立地区分図<sup>3)</sup>によると、朝来花崗岩山地の分類にあたり、花崗岩を母材とした小規模山地～丘陵地形の山地となる。

東河地域の山塊は、A、安山岩類・緑色凝灰岩類 B、古生層と、C流紋岩類から成り立つ。

東河地域は東の夜久野高原に源を発する東河川の流域にあたり、白井・宮・久田和・東和田・中・野村の各村を経て岡田そして柳原から和田山に至り、円山川に合流する。つまり、岡田地区は、東河地域の西端に位置し、東河川が南に曲がり、和田山市街を臨む位置にある。

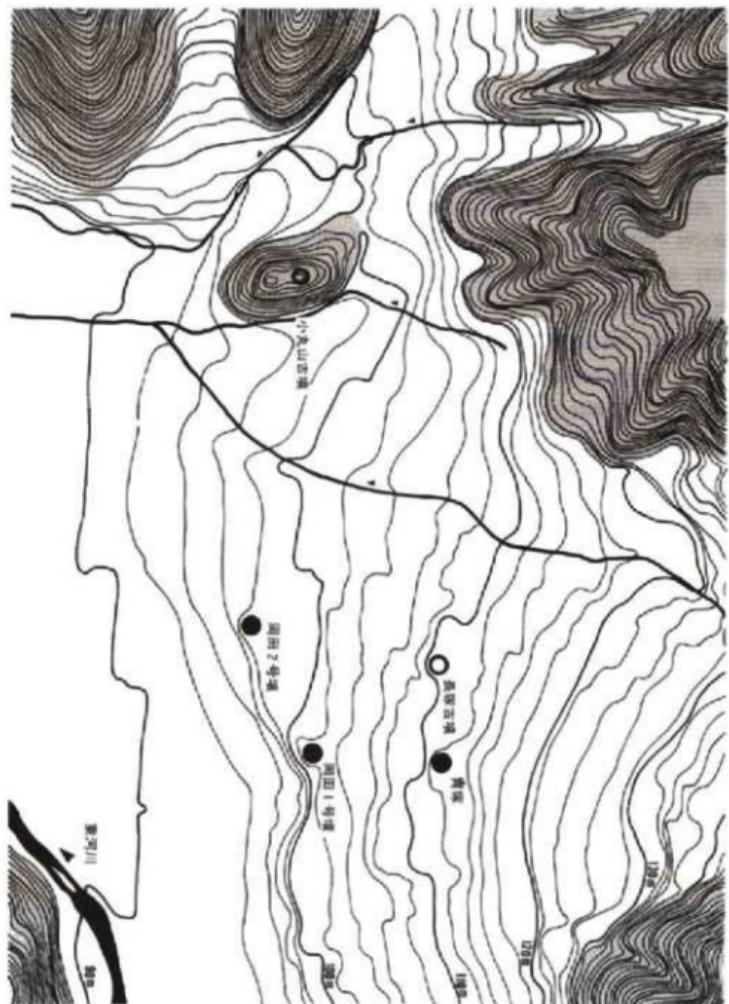
岡田古墳群は標高約98mから118mに位置する。北の男山から派生する山麓斜面で、南方向に向き、扇状地化する地形に位置し、微弱な尾根状を呈する立地の頂部に位置する。ただ、小丸山古墳のみ独立丘陵の頂部に位置することは特異である。岡田2号墳は98m、岡田1号墳は103m、長塚古墳は113m、背塚古墳は112m、小丸山古墳は106m近くに基底部の高さをもとめられる<sup>4)</sup>。

岡田2号墳の名称について、地元での呼称と合致しないことが、現地調査に入り、わかったので、ここで改めて、岡田地区の字限図を調べ、また、周知の道路の名称を付した経緯を調べることが必要となった。挿図6の字限図をみると

向田・井口・野々花・ハサコ・金畠・三谷尾・清水・家本・中麻田・坂・西・大道・中道・兜塚・サガタ・取垣・郷ノ木・茅原・古戸・堤・更井・坊寺・小丸山  
とよみとれる。

岡田古墳群の旧米の名称と字限を合わせると岡田2号墳(字兜塚)、岡田1号墳(字野々花)、長塚(字兜塚)、背塚(字金畠)、小丸山古墳(字小丸山)となり、字名と古墳の名称と合わないこととなる。地元での呼称は、岡田2号墳は兜塚、岡田1号墳は不明、長塚は長塚、背

图四、西田古坟群と地形地図



塚は東塚古墳と、差異が生じている。地元での保存、啓蒙にあたっては、地元での呼称が重要であり、今後、問題を整理する必要があると思われる。

## 註

- 1) 「土にいどむ」1974年、和田山土地改良区  
「和田山町行政誌」1973年、和田山町に町村合併史が詳しい。
- 2) 「東河誌」1953年、東河誌編纂委員会には「岡田かぶと塚外数ヶ所の塚、野村の塚、…」という古代の墳墓についての記載もある。
- 3) 「兵庫県森林立地区分図」「林野土壤調査報告出石・但馬竹田」1973年、兵庫県
- 4) 描図5は和田山町の昭和42年は場整備以前の地形図が手に入らなかったので、岡田古墳群の立地景観を復原するために、は場整備後の図面より等高線を作図したものである。



図5 岡田地区字別図

## 第2章 歴史的環境

岡田古墳群が所在する和田山町は、兵庫県の北部・但馬の南部に位置している。朝来郡生野町に源を発する円山川が和田山町中心部で北東方向から北西方向へ急激に流れを変えるあたりで、与布土川・東河川・糸井川等の支流河川が合流して、円山川上流域では比較的広い平野部を形成している。また、和田山町は播磨からのルートと山陰道の接点でもあり、原始・古代から交通の要衝として重要視されていた地域であろう。このことは、特に5世紀代から6世紀にかけての大・中規模古墳が集中して存在していることからも裏付けることができる。以下、町内の主要道路について、時代を追って説明を加えることとする。

町内において、旧石器時代の遺構・遺物は未だ確認されるに至っていない。縄文時代においても遺構は確認されていないが、遺物の出土から遺跡は存在すると考えられる。円山川の支流、糸井川の右岸に位置する寺内遺跡では、晩期と考えられる土器片が出土している。また、高瀬遺跡では、晩期の浅鉢片・深鉢片が出土している。さらに、和田山町南部の加都地区からは、叩石が採集されている。調査資料では、片引遺跡から縄文晩期の土器が検出されている。

弥生時代の遺跡については、調査資料が少なく不明確ではあるが、遺物の出土地点から今のところ13箇所の地点で遺跡の存在を推定することができる。前期においては、削り出し突帯を有する土器が出土した片引遺跡が先行して出現し、貼り付け突帯を有する小型の壺が出土した安井遺跡、ヘラ描き沈線文を施した土器片が出土した高瀬遺跡などがそれに続く。中期においては、中期後半の高杯が出土した林垣遺跡がある。また、ここからは環状石斧も出土している。さらに、出土地点は不明であるが、中期後半の脚付無頭壺が出土している。石器のみ単独で出土した主な例としては、加都の集落内より石鏡が、また、高田地区からは抉入石斧が出土している。後期においては、町道改良工事に伴って実施した池田古墳外堤部の発掘調査の際、下層より後期の遺物が出土した。この遺物に関連する遺構は確認していないが、東谷から平野地区にかけて存在する円山川左岸に形成された段丘上には、後に城の山古墳や池田古墳出現の基盤となる聚落が営まれていた可能性は極めて高く、今後の調査に期待するものがある。その他に、東見寺遺跡からも後期の遺物を検出している。このように、和田山町内で弥生時代の聚落遺跡は多く確認されているものの、不時発見の遺跡が多く、個々の遺跡の内容等、詳細にわたって説明を加えることはできないが、隣接する山東町においては、柿坪遺跡、仲田遺跡、森向山遺跡、五反田遺跡など、発掘調査によってその様相が明らかになってきている遺跡が増加している。弥生時代の墳墓の調査では、近年、豊岡市域を中心として調査例が増加しているが、和田山町域では調査例は少ない。わずかに筒江中山古墳群中に築かれた、後期に比定される墳丘墓1基のみである。中山丘陵の山頂部から西に派生する尾根の先端に築かれた墳丘墓で、円形を

意識して作られ、この時期では非常に特異な形態を有するものである。主体部は、木棺直葬である。なお、山東町内においては、柿坪中山墳墓群、五反田墳墓群など徐々に調査例が増加している。

古墳時代の集落道路についても、弥生時代の道路と同様に、全く不明であるといつても過言ではない。しかし、若干の出土遺物から道路の存在が推定できる地域は数箇所存在する。主なものでは、高瀬道路からは、5世紀前半に推定できる古式土師器片が採集されており、加都地区からは、小型丸底壺が出土している。生産道路では、岡田地区で6世紀後半の須恵器窯が3基確認されている。また、高瀬地区のは場整備工事中に窯跡が採集されており、窯の存在が推定される。

古墳時代前・中期の墓制は、弥生時代の墓制を引き継いだ尾根上に連続して作られるいわゆる群小古墳が大勢を占める。この種の古墳群は、豊岡市域で多く確認されているが、和田山町周辺地域でも例外ではなく、筒江中山古墳群、筒江梶原古墳群、秋葉山古墳群、山東町では柿坪中山古墳群、馬場古墳群など、調査例も増加している。しかし、それとは別に和田山町周辺地域では、特に4世紀後半から6世紀にかけて、大・中規模の首長墓クラスの古墳が集中しており、但馬の古墳時代史を考えるうえで必要不可欠な地域である。以下、この種の古墳を中心に順を追って説明を加える。

4世紀後半に比定されている東谷の城の山古墳は、西から延びる尾根の先端に位置し、地山整形によって作りだした直径約36mの円墳である。主体部は、墳頂部に長大な木棺を1基構築し、鏡・碧玉製石製品・玉類などの豊富な遺物が副葬されていた。4世紀代の但馬における首長墓の特徴は、豊岡市の森尾古墳などに見られるように、畿内的な様相を持つ一方で、弥生時代以来の在地的な墓制を捨て去ることができなかった段階として認識されているが、その中にあって城の山古墳は、畿内的な様相をより強めた古墳であるといえよう。一方、城の山古墳とはほぼ同時期に構築された古墳の中で特筆すべきものに、筒江中山23号墳、山東町・馬場19号墳がある。筒江中山23号墳は、中山丘陵の山頂部に立地する約27mの円墳である。主体部は、礫床を持った長大な木棺を墳頂部に1基構築し、内行花文鏡や、鐵劍・鐵斧などが副葬されていた。この古墳は、規模・内容等から城の山古墳に從属する古墳と考えられ、円山川支流域を中心とする一定の地域を総括し得た人物の墓と考えられる。馬場19号墳は、山東盆地を見おろす頂部尾根の突端に立地する。自然地形を最大限利用して作られたこの古墳は、墳形・規模とも明確に判断することができないが、墳頂部に構築された3基の小さな木棺直葬のうちの1基から方角規矩鏡が一面出土している。古墳の構造から見ると完全に集団内に埋没していると思われるが、出土した方角規矩鏡は城の山古墳のそれと大きさ・文様構成ともよく類似しており、遺物の内容からすれば、群中の他の古墳との格差が明瞭に認められ、注目される。これらの古墳2例は、城の山古墳とあわせて4世紀後半の社会的・政治的構造を探るうえで貴重な資料で



地図7 和田山町内の主要遺跡 (1/50,000) 「竹馬竹田」、「出石」

1. 片引道跡 2. 安井道跡 3. 高瀬道跡 4. 林坂道跡 5. 坡の山古墳 6. 池田古墳
7. 長持型石棺 8. 丸山古墳 9. 箕江中山古墳群 10. 箕江原古墳群 11. 秋葉山古墳群
12. 同田古墳群 13. 加郡牛塚古墳 14. 加郡王塚古墳 15. 長尾古墳 16. 東見寺道跡 17. 春日古墳
18. 大谷2号墳 19. 同田古墳跡群 20. 法鵬寺跡 21. 竹田城跡

ある。

5世紀代に入って、首長墓の様相は一変する。典型的な畿内型の古墳の出現である。町内で、5世紀代の前方後円墳として確実なものは、今のところ池田古墳と岡田古墳群の中のひとつである長塚古墳があげられる。また、町外に目を向けると、朝来町の桑市に所在する船宮古墳がある。なお、町内宮内地区には、全長約55mの前方後円墳の可能性のある丸山古墳が存在するが、削平のため詳細は不明であり、時期を限定することはできない。これらの古墳のうち池田・船宮古墳は、いずれも段築で蓋石を持ち、埴輪を有している。さらに特徴的のこととは、いずれも周濠を持ち、畿内大王墓そのものの形態を有していることである。このことは、畿内勢力との強い結びつきを想定させる。池田古墳は、全長141mを測る前方後円墳で、但馬最大の規模を持つものである。内部構造は、以前の土取りのため不明である。出土した埴輪の形態から、5世紀前半～中頃の時期の墓造と考えられる。ところで、昭和59年に町内高田地区の墓地内より、長持型石棺が発見された。蓋石の破片であるが、出石町所在の長持型石棺と同様に、大阪府津堂城山古墳のそれと酷似している。さらに両者とも、播磨加古川付近の「龜山石」を石材としている。残念ながら、古墳本体からは避離してはいるものの、このことは少なくとも5世紀前半代の時期に播磨を経由した畿内勢力の直接的な介入があったものと推定される。

池田古墳の次にくる首長墓系列の古墳は、朝来町の船宮古墳であろう。池田古墳よりは規模は小さくなるものの、典型的な畿内型の古墳である。船宮古墳は、昭和55年度に武庫川女子大学考古学研究会によって測量調査がなされた後、昭和62・63年度に墳丘周辺の発掘調査が行われ、周濠を含めると全長約120mの規模を持つことが明らかにされた。発掘調査により出土した埴輪の形態から、5世紀後半に墓造されたものと考えられる。ところで、この船宮古墳が墓造される時期にやや遅れて和田山町を中心とする各所で埴輪を持つ比較的大型の円墳や前方後円墳が墓造されはじめる。今回報告の岡田2号墳を含む岡田古墳群をはじめとして、加都車塚古墳、山東町・森向山古墳群、養父町・觀音塚古墳、同町・上野1号墳は、いずれも5世紀後半から6世紀初頭にかけて形成された古墳及び古墳群である。これらの古墳(群)は、例えば、加都車塚古墳を例にとると、先に述べた簡江中山23号墳と同一の支流水系内にあり、両者に若干の時期の隔たりはあるものの簡江中山23号墳から加都車塚古墳へといった地域首長の系譜としてたどることができる。その他の古墳(群)で、このような流れを確認することはできないが、少なくともそれぞれの水系あるいは交通の要所をおさえる古墳(群)として位置付けられよう。

6世紀後半から7世紀初頭にかけての、いわゆる横穴式石室墳は、町内各所でその存在が明らかにされている。規模的にみて、普通の程度のものばかりで大規模な横穴式石室墳は見られないが、長尾古墳、東見寺古墳、春日古墳、町外では朝来町の三町古墳など、金銅装の遺物を出土した古墳が多くみられる。特に、長尾古墳は、簡江中山23号墳→加都車塚古墳→長尾古墳といった一連の首長墓系列の流れとしておさえることができ、注目される。

歴史時代の遺構・遺物については、加郡地区より複雑蓮華文軒丸瓦と平瓦片が、また、法興寺地内においては繩目叩きを有する平瓦片が多数採集されており、寺院址の存在を想定することができる。調査資料では、筒江中山古墳群中より確認された平安時代の墓址や、中世の建物が検出された東見寺遺跡などがある。

中世の城跡については、町内各所でその存在が知られているが、特に竹田城跡は全国屈指の山城として著名である。嘉吉年間、山名氏の家臣である太田垣氏によって築城された当時は、土壘・堀切り・タテ堀などによって防御された郭群によって構成されたものであったが、鎌倉期に總石垣作りの城郭に作り替えられた事実は、但馬の中世から近世に至る社会的動向を探る上で重要である。また、主郭部の改築にあわせて城館を含む城下町も、この時期に整備された可能性もあり、城郭遺構だけでなく山麓に広がる城下町も含めた、総合的な調査研究がなされるべきである。今後の調査研究に期待したい。

#### 参考文献

- 1 「兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和57年度」兵庫県教育委員会 (1985)
- 2 「祐坪遺跡現地説明会資料」山東町教育委員会 (1978)
- 3 「仲田遺跡現地説明会パンフレット」山東町教育委員会 (1987)
- 4 「森向山遺跡現地説明会資料」山東町教育委員会 (1986)
- 5 藤井祐介・高島信之「秋葉山古墳群」和田山町教育委員会 (1978)
- 6 横本誠一・山本三郎「城の山・池田古墳」和田山町教育委員会 (1972)
- 7 「五反田・馬場遺跡群現地説明会資料」山東町教育委員会 (1986)
- 8 平良泰久「国家形成期の日本海」「歴史公論」88 (1983)
- 9 但馬考古学研究会「但馬の長持型石棺」「古代学研究」107 (1985)
- 10 「船宮古墳現地説明会パンフレット」朝来町教育委員会 (1987)
- 11 武庫川女子大学考古学研究会「但馬の古墳II・岡田古墳群測量報告」(1974)
- 12 池田正男・諫辺昇「養父・觀音塚古墳」養父町教育委員会 (1980)
- 13 横本誠一「兵庫県和田山町筒江出土の頭櫛大刀」「古代学研究」67 (1973)
- 14 横本誠一「上山五号墳・大谷二号墳」「秋葉山古墳群」和田山町教育委員会 (1978)
- 15 「発掘された朝来の歴史展」朝来町教育委員会 (1986)
- 16 北垣理一郎「竹田城」「兵庫県の中世城館・莊園遺跡」兵庫県教育委員会 (1985)

## 第3章 遺跡の調査

### 第1節 第1次調査

#### 1. 調査の方法

道路拡幅予定地内について岡田2号墳墳丘が残っているかどうか、土層断面観察を行うトレンチ（試掘溝）を幅1mで南北方向に2本設けると同時に、既に崖面となっている墳丘断面の清掃を行い、残存状況を把握することより始めた。2本のトレンチを第1・第2トレンチと呼び、精査の結果、トレンチ間及び崖面までの拡幅予定範囲についてトレンチを設け（第3・第4トレンチ）、それをつなげて調査を行った。更に、東へ第5トレンチを延ばし、岡田2号墳の周囲に0.5-1m四角の試掘穴を設け、土層堆積状況を把握した。なお、調査の進行状況については、調査日誌にて述べる。

#### 2. 調査日誌（昭和62年6月2日～6月6日）

6月2日㈬

朝、写真・測量器械を車に積み込み、神戸を出発し、昼前に和田山町教育委員会に到着し、藤井社会教育係長と打合せを行い、町所有の発掘調査用具を借り受ける。午後1時、岡田2号墳に到着する。朝来郡広域行政事務組合、田畠氏の助力で、和田山町内で文化財調査にたずきわらる作業員の方々を紹介していただき、本日よりの調査体制が固まる。午後1時30分、八鹿土木事務所工務第1課福岡氏とともに、地主及び岡田地区総代に挨拶を行った後、作業を開始した。現況写真撮影後、草刈りと表土層の清掃を行い、第1・第2トレンチを設け、露出している土層断面を観察する。早くも、墳丘断面の清掃時に弥生土器を検出する。つまり、岡田2号墳の下部に弥生時代の遺跡が存在する。

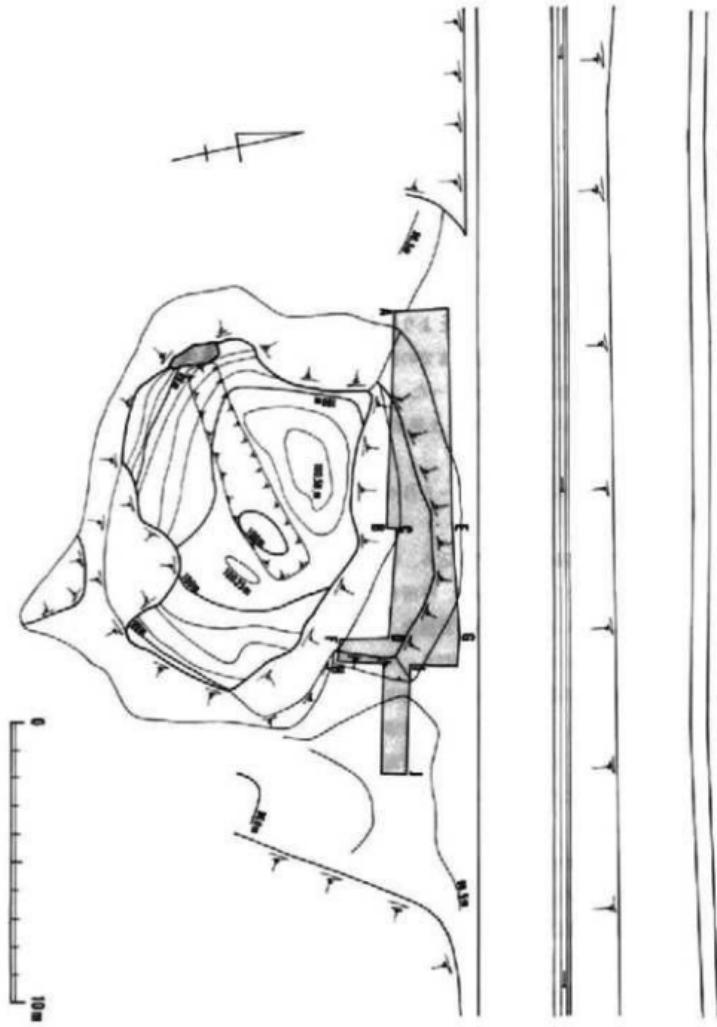
6月3日㈭

雨のため、作業は午後からとする。第1トレンチでピットを検出し、新しく設けた第3トレンチでは、客土及び旧表土層から、弥生土器・石斧・須恵器・土師器の遺物が出土した。第2トレンチでも弥生土器を発見する。また、調査地区的地形平板測量を行う。

地元の元区長や古巣が3人来られて、昔の調査のことや小丸山古墳のことなどの話を伺う。岡田2号墳は、地元において兜塚と呼ばれ親しまれており、兜塚は通称東塚と呼ばれているとの指摘を受け、改めて古墳の名称について字眼図や命名の経緯を調べてみる必要を感じた。

6月4日㈮

図1 第一大網羅の位置図



新しく、第4トレンチを設け各トレンチでの調査を続ける。第3・第4トレンチで土器が多く出土し、第3トレンチでは溝・ピットを検出した。第1・第2トレンチでは、土層断面精査を行い、写真撮影後、実測を行う。

岡田2号墳の墳丘は、調査区内では近世開田時や昭和42年（当時）のは場整備事業及び県道の取付工事によって壊され、一部のみを残す状況となっていた。

平板による墳丘測量を行い、更に墳丘の崖面にて弥生土器の包含層を見出し、調査区西の古墳下にも弥生時代の遺跡が残っていることを確認した。ここで、旧地形の復原により、弥生時代の集落と古墳の立地や環境を復原する必要を生じた。和田山町教育委員会 藤井係長来路。

#### 6月5日㈮

第1・4トレンチ間の上層観察用の畦を除去し、遺構検出を行い、遺構検出写真を撮る。遺構を掘り、弥生時代の円形堅穴住居跡を復原する。夕方に、全景写真撮影。

また、新しく第5トレンチと、周辺に弥生時代の遺構の有無を確かめる1×1mの坪2箇所（1・2G）を設けた。

#### 6月6日㈯

遺構の平面図と断面図を作製し、調査を完了させる。10時過ぎ、八鹿土木事務所の福岡氏、社会教育・文化財課の井守主査と現地において調査後の取扱いを協議する。

1) 道路拡幅工事により、これ以上岡田2号墳を壊すことなく、法面工事について工法を検討する。

2) 古墳だけではなく弥生時代の住居跡など遺構の広がりが考えられるため、北側の掘削時には協議を行い、立会い調査が必要である。

また、11時過ぎ、岡田地区の要請で、現地にて簡単な調査報告をかねた説明会を行い、人々から様々な教示を得て、今回の調査を終了した。

#### 3. 土層

土層観察は、調査区南壁（A～D・H～F）と南北断面（B～E・F～G）で行った。

上層から述べると、第1層は表土層・第2層は水田耕土で、第3層は水田造成の際の盛り土である。第4層は墳丘の底土で、第6層は耕作土の床土である。

神奈川をみるとB点とC点で土層の食い違いが見られる。C～D間では水田耕土が認められるが、A～B間では水田土壤は検出していない。しかし第6層は耕作土の床土であり、古墳の北側にも水田があったことが判明した。B・C点での土層の食い違いは、現在の道路ができる以前に水田の境がB（C）点にあったことを示している。

第7層から第16層は、古墳造営以降の土層である。第14層黒色砂質シルトからは弥生土器が出土しているが、これは弥生の遺物包含層が盛り土として使用されたためであろう。第9・11・13層は、B・C点を境として西から東への傾斜を見せており、自然堆積ではなく盛り土である。

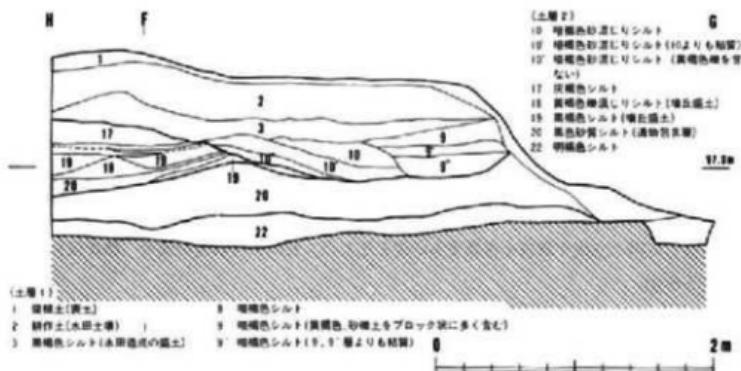


図9 第2トレンチ土層断面図

う。第10層は、その東側の落ちを埋めるための盛り土と考えられ、第2層に見られる水田を造成する際の盛り土と思われる。

調査の目的である古墳の埴丘は、挿図9に見られる第17~19層のみで、他の断面では確認されなかった。特に第18層黒褐色混じりシルトと第19層黒褐色シルトは互層となっており、古墳造営の際の盛り土の状況を良く示している。

その下の第20層黒色シルトからは弥生土器が出土しており、弥生時代の遺物包含層である。古墳の埴丘は、この上に築かれている。この層は、東端(I~J)を除く調査範囲全域で認められた。

第20層の下は地山で遺物は出土していない。この地山を掘り込んで弥生時代の遺構がつくら

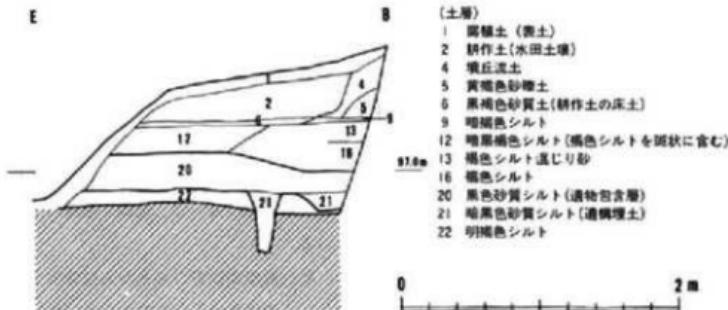
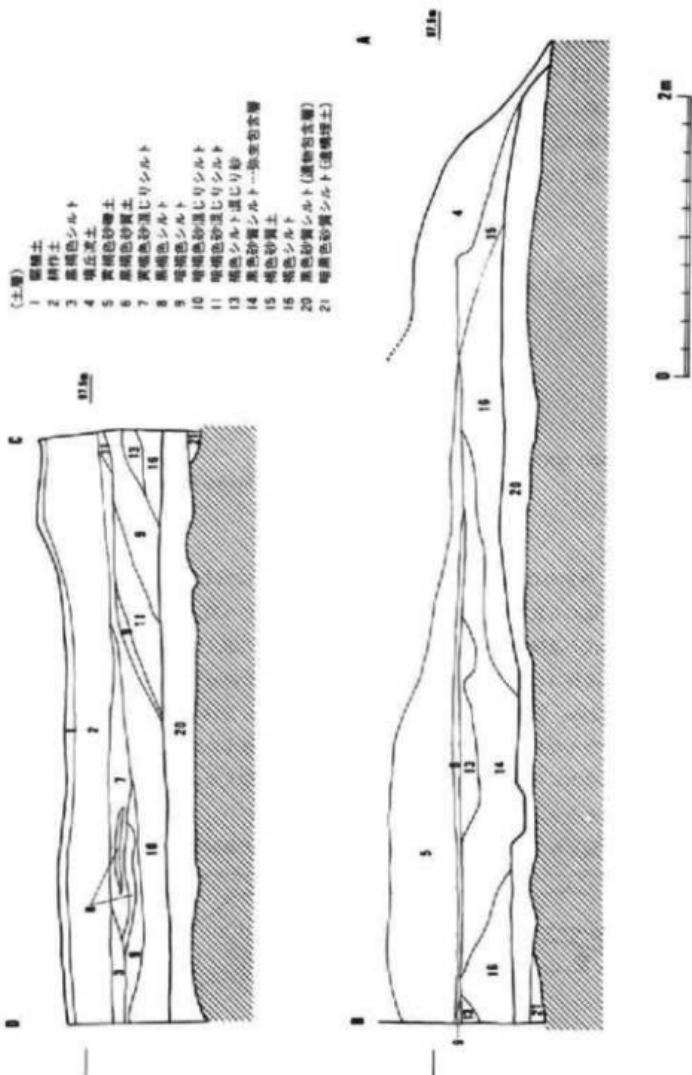


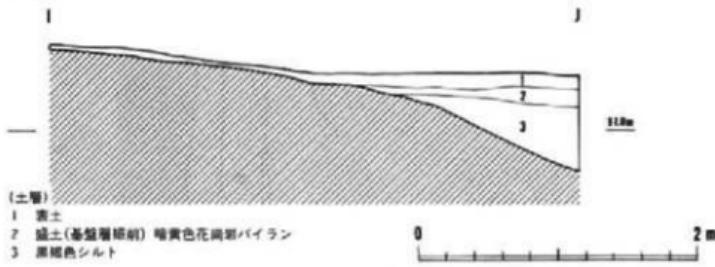
図10 第1トレンチ土層断面図

図11 土壌断面図



れている。地山は基本的には礫の混じった褐色シルトで、調査区の東半分ではその上に砂混じりの褐色シルトが堆積していた。

調査範囲の東端（I～J）は、挿図12に見るよう急に東北に向かって落ち込んでいる。第2層は、地山を掘削した盛り土である。第3層の黒褐色シルト（径5cm位の礫を含む）は、第20層とは異なり遺物は出土していない。水分を多く含む層である。第1次調査の際には時期が不明であったが、第2次調査で同様の落ちを検出し、その結果、古墳造営以降に掘削されたものと判明した。



挿図12 5トレンチ土層断面図

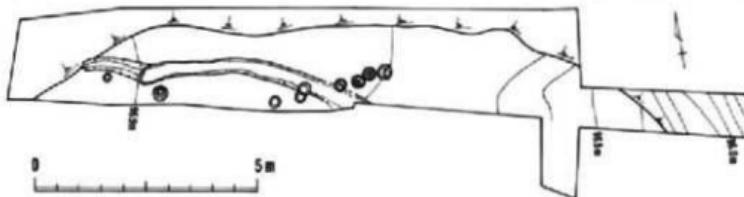
#### 4. 造構・遺物

第1次調査では、当初の目的である古墳時代の造構は挿図9に示すように、調査地区端で古墳の盛り土が断面で認められたのみで、平面的には検出できなかった。

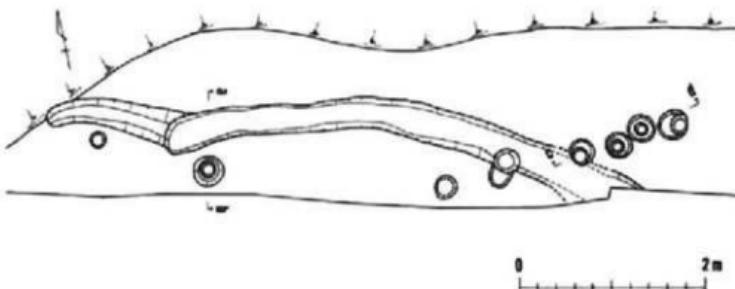
第20層の弥生時代の遺物包含層を除去したところ、地山面で溝2本と柱穴9個を検出した。地山面は北東から南西にかけて緩やかに傾斜しており、10mで40cm下がる。

東方の溝は、幅40cm・深さ約5cmを測り、南に開く弧状をしている。調査範囲が少ないため全貌は検出できなかったが、円形住居跡の周壁溝の一部かと考えられる。検出面からの深さはほぼ一定であり、底のレベルは西から東に向かって5cm前後深くなっている。これは排水機能を考えたことであろう。

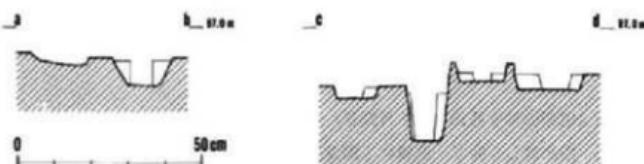
溝内は暗黒色砂質シルト（第21層）が堆積し、これは上層の第20層に似ている。溝の深さが



挿図13 造構図



挿図14 猿生時代の住居跡平面図



挿図15 猿生時代の住居跡断面図

ら考えて、住居跡の切り込み面は地山面よりも上方であるが、断面を精査しても第20層中に隔壁の立ち上がりを検出できなかった。

西方の溝も弧状をしている。長さ約1.3m・幅約30cmを測る。西端は道路建設の際に削削されているが、東端は東側の溝で切られており、その先には延びて行かない。検出した部分が短すぎ、円形住居跡の隔壁溝とは断定できない。

柱跡は深さが一定ではなく、浅いものは10cm、深いものでは40cmも検出面（地山面）から掘り込まれている。確實に円形住居跡に伴うと判断できるものはないが、溝の内側にある2個は住居跡に伴う可能性がある。

遺物は、弥生土器が第20層から出土しているほか、磨製石斧（挿図21 S 1・図版12）が溝の弧の内側の地山面から出土している。住居跡に伴う遺物の可能性がある。

その他遺構ではないか、調査区の東端は北東に向けて急に落ちている。遺物は出土していない。

猿生時代の遺構は、当然岡田2号墳の下へ延びていると考えられるが、現状では県道の南側は場整備で削平されており、古墳の下に遺存しているだけと思われる。

## 第2節 第2次調査

### 1. 調査の方法

八鹿土木事務所より道路工事着工の旨、連絡が入ったため、8月17日に現地立会いを行い第2次調査の方法について協議を行った。

岡田2号墳の平行した東西幅のみを残して、西の部分は掘削が完了し、北のは場法面も現道の高さまで掘削がされていた。その跡を土層断面観察すると、約32m強の範囲で包含層が認められ、西端で残った溝状堆積のシルト層内に埴輪が多數認められた。これらが岡田2号墳の周濠及び埴輪であると推定され、工事から守られたわずかな範囲のみ第2次調査をすることになった。幅については、約3m程度、現道については、可能な限り調査を行うこととなった。調査地区は山麓斜面からの排水を受ける場所にあたり、排水溝を設け、分割して調査をせざるを得なかった。

### 2. 調査日誌（昭和62年9月16日～9月22日）

9月16日(水) 雨が激しく降り、現場にて調査打ち合わせを行ったのみにて終る。

9月17日(木) 調査地は雨水が激しく、排水溝を設けることより作業を開始する。なんとか、土層断面を精査し、包含層の状況及び柱穴などの遺構を把握する。

9月18日(金) ようやく乾いたので、西端より造構面の検出を行い、岡田2号墳の周濠と考えられる溝の残存部を調査する。その他は、道路及び掘削により壊れていた。

9月21日(月) 周濠内のシルト層を掘削し、木片とともに埴輪を多く発見する。埴丘南部はすでに破壊されているが、東端で東への落ちの埋土内に平安時代の黒色土器を検出した。

9月22日(火) 午前中にて、周濠、東端部の調査を終了し、午後から八鹿土木事務所及び地元への説明会を行なう。岡田の方々から長塚や青塚出土の埴輪他の遺物を見せて戴き、色々教示を受けた。造構面作製などの作業は、朝来郡広域行政事務組合の田畠氏の協力があり、夜には完了した。和田山町教育委員会に器材を返納し、調査を終了した。

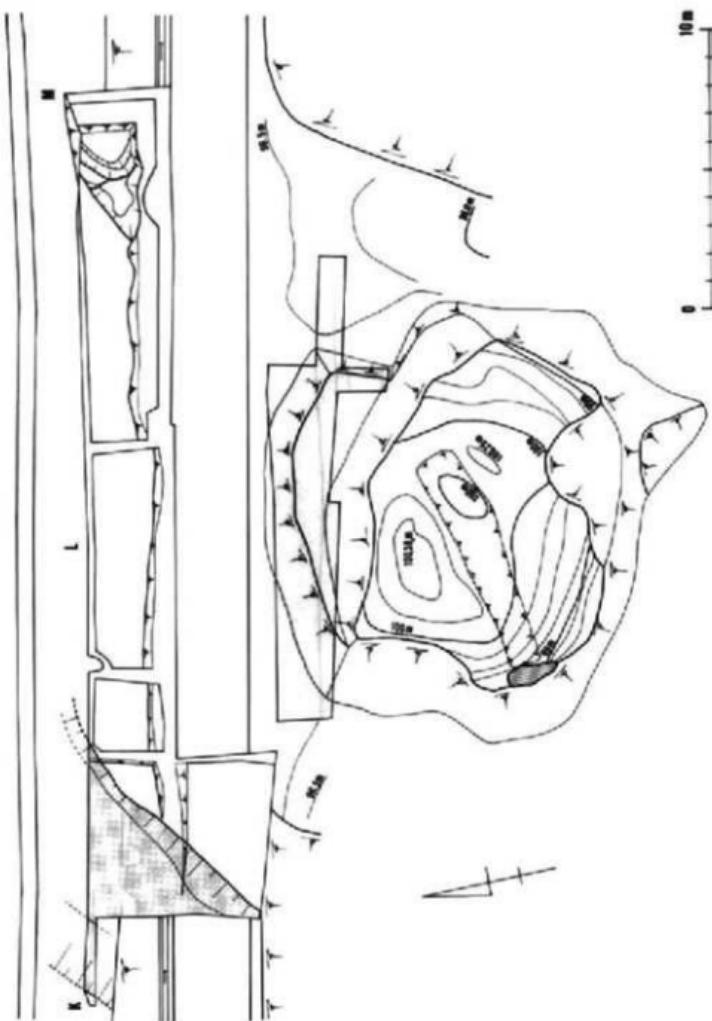
### 3. 土層

第2次調査では、調査範囲がほ場整備後の水田区画の大畦畔の法面に当たっていたため、調査区の北壁で土層を観察した。

上層から見ていくと、第1層は大畦畔の盛り土、第2層は水田耕土、第3層はほ場整備の際の盛り土である。またこの3層の下に薄く延びる第2層は、ほ場整備前の水田耕土である。第1次調査の際にA-B間（挿図11）で見られた第6層の上層に想定される水田に対応するものと考えられる。

第4層は黒褐色シルト層で、第1次調査の際にI-J間（挿図12）で見られた第3層に対応

図11 第1次開拓の仕事図



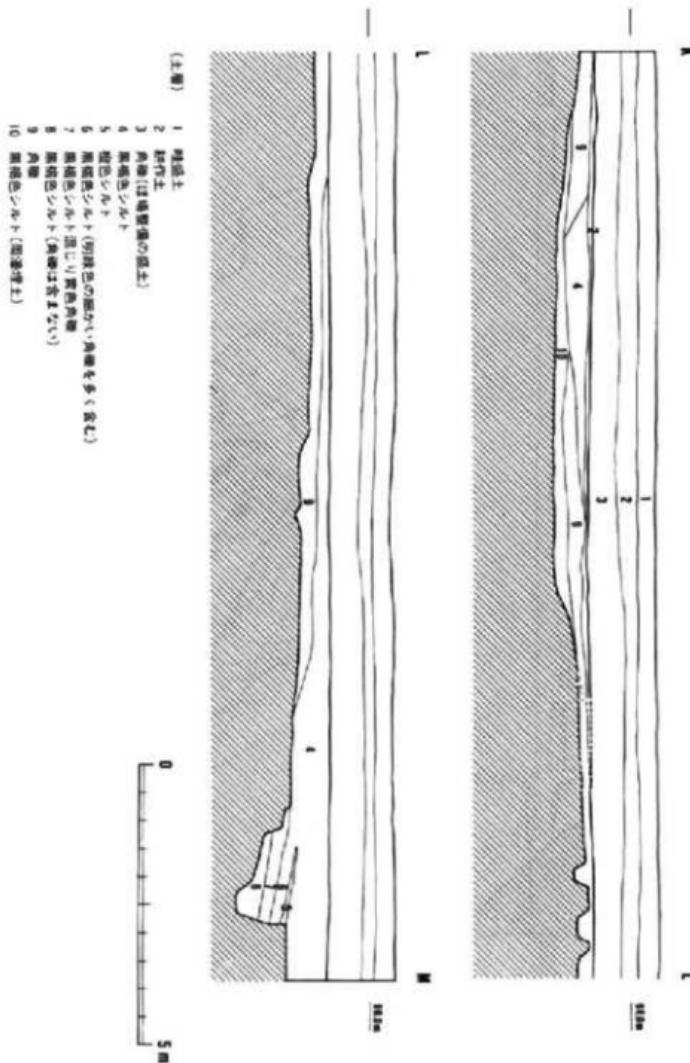


図17 土層断面図

するものである。以下第5～8層は東側の落ちに堆積した層で、第5層以外は黒褐色シルトを基本としており、第6・7層では礫を含んでいる。

第9層は、第1次調査では見られなかった層で、黒褐色シルトが混じった角礫の層である。

第10層は、小角礫を含む黒褐色シルト層で調査地区の西端でのみ検出した層であり、古墳の周濠の堆積土である。

#### 4. 造構・遺物

第2次調査では、調査区の西端で古墳の周濠を、北壁の断面で柱路を、東端で落ちを検出した。

第1次調査の際には、岡田2号墳の規模を小さく考えていたため、周濠の存在を予想していなかった。第1次調査終了後、県道の改良工事中に埴輪片が出土したため、調査を行うに至った。そのため周濠の西の肩は調査区北壁断面で確認するに止まった。検出面での幅は5.6m、深さ約60cmを測る。埋土の黒褐色シルトからは埴輪片が多量に出土している。周濠の東肩については、調査区北壁の断面が暗渠排水で擾乱されており、どの層から切り込んでいるかは確認できなかった。

柱路は、断面で3箇所確認した。中からは弥生土器片が出土している。

東端の落ちは、東に向かって急に落ち込んでいる。第1次調査区の東端で検出した落ちにつながると考えられる。出土した土器から、平安時代に属するものである。

その他、道路で削平されていたため平面的には造構は検出できなかった。

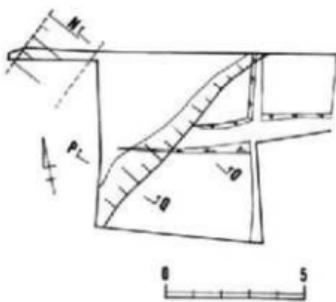


図18 周濠平面図

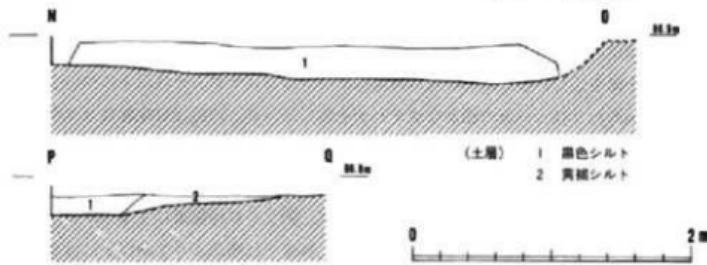


図19 周濠内埋土

### 第3節 遺物

岡田2号墳墳丘積み土内から古墳時代中期の土師器と須恵器、周濠内から埴輪（円筒・朝顔形）が数多く出土した。墳丘下部の弥生時代円形竪穴式住居跡の埋土から弥生時代中期の土器と石斧2点が和田山町内では初めて遺構（円形住居跡）から出土した。又、第2次調査の東端の落ちでは、黒色シルト内より平安時の黒色土器などが若干出土している。

#### 1. 弥生土器（挿図20 A1～A23）

弥生時代の土器は、ほとんどが第1次調査区の第20層黒色砂質シルト層から出土したものである。またその多くは細片で、図示できたのは挿図20の23片だけであり、A7以外は図面上で反転復原をしている。

A1からA4までは壺の口縁である。A1は口縁端部にヘラ状工具による格子目文を刻んでいる。格子目文は右上がりを先に右下がり後で施している。外面には、ヨコナデを施している。A2は口縁端部に1条の凹線を施し、全体はヨコナデ調整を行っている。A3は縁やかに外反したのち端部付近で外方へ屈曲し、端部を上方へつまみあげている。外面には1cmあたり6～7条のタテハケを施している。A4は口縁端部を上方へつまみあげた後やや内傾させている。口縁部端面には4条の凹線を巡らし、その上に円形浮文を2個貼り付けている。外面は細かなタテハケを施し、内面は目の粗い（1cmあたり5条）のヨコハケを施している。

A5・A6は壺の口頭部である。A5は頭部に2条の突帯を施らしている。約八分の一遺存しているが、器壁が荒れており、調整は不明である。A6は外面には細かなタテハケを施し、内面は、肩部より下は左上がりのヘラ削りをし、上はヨコハケを施している。

A7は高杯の脚部である。外面には、不明瞭であるか縱方向の細かなハケ目（1cmあたり10本）が認められる。

A8は口縁の一部であるが、器種は不明である。外方に広がったのち上方に屈曲する。全面にヨコナデ調整が見られる。

A9～A11は、いずれも「く」の字形に屈曲する口頭部をもつ壺である。A9は口縁端部に3条の凹線を施らしている。頭部から口縁部にかけてはヨコナデ、それ以下についてヨコナデの上に1cmあたり12～13条の細かなタテハケを施している。内面は口縁部はヨコナデ、頭部以下は左下がりのヘラ削りを施している。A10は口縁端部に2条の凹線が残り、内面はヨコハケ、外面はヨコナデの上にタテハケを施している。A11は、同じく口縁端部に2条の凹線が残っている。口縁の遺存率は約十八分の一である。調整は、外面では頭部より7mm以下にはヨコナデの上に1cmあたり10本以上の細かくて浅いタテハケを施している。内面については頭部以下は右

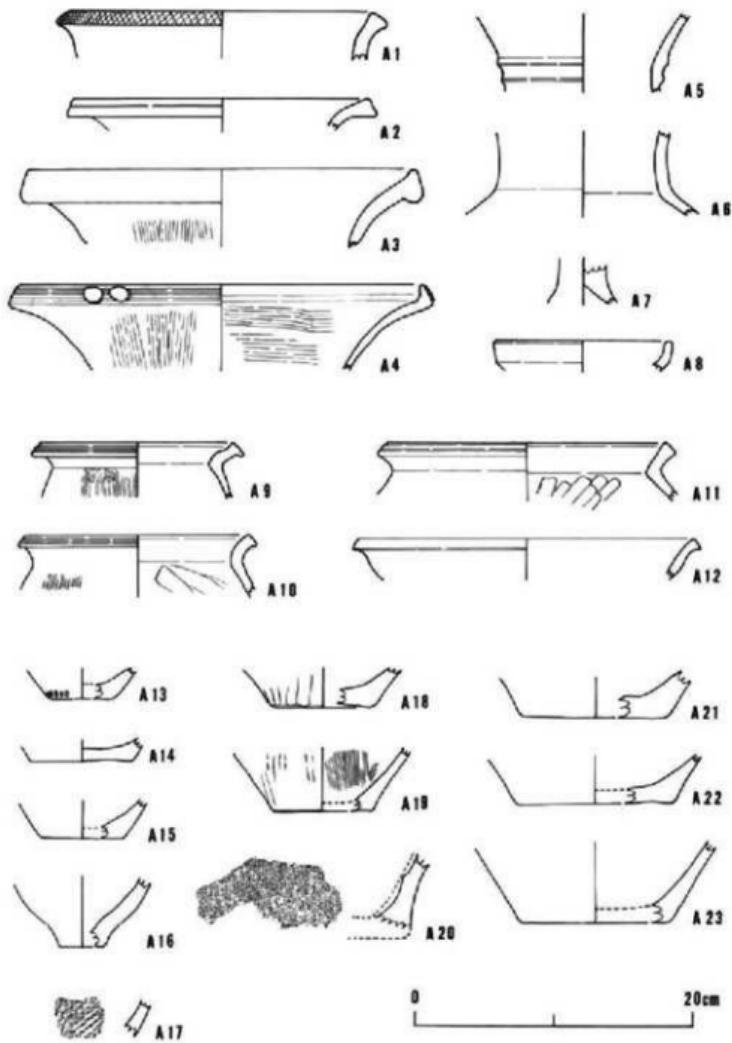


图20 异生土器

上がりのヘラ削りを施している。口縁部は、内外面ともヨコナデ調整である。

A12は、鉢の口縁部かと思われる。全体に表面が磨滅しており、調整は不明である。また口縁端部も剝離している。遺存している部分が少ないので、口径や断面の角度が変わる可能性もある。

A13からA23まで（A17を除く）は土器の底部である。A13は4cm四方の小片で、器壁は荒れており、調整は不明である。外面の底部に近い位置に、ヘラ状工具による刻み目が六箇所認められる。この刻み目は約2.5cmの幅の間につけられており、全周するものではなく、一定の単位をもって底部を飾るものであろう。A14は

遺存している全面にナ

デが認められるだけで

ある。A15は外面に底

部から胴部にかけてヘ

ラ削りがなされている。

その他の調整は不明で

ある。A16は小型の甕

かと思われる土器であ

る。調整は不明瞭であ

るが、外面はヘラ磨き

が施されている。また

底部に近い部分にはヨ

コナデが認められる。

内面は、高杯などの脚

部にみられるような絞

り込みが見られ、その

上に不定方向のナデ調

整を行っている。

A17は外面に叩き目

をもつ甕の胴部破片で

ある。約3cm四方しか

遺存していないため、

傾きについても復原が

困難である。

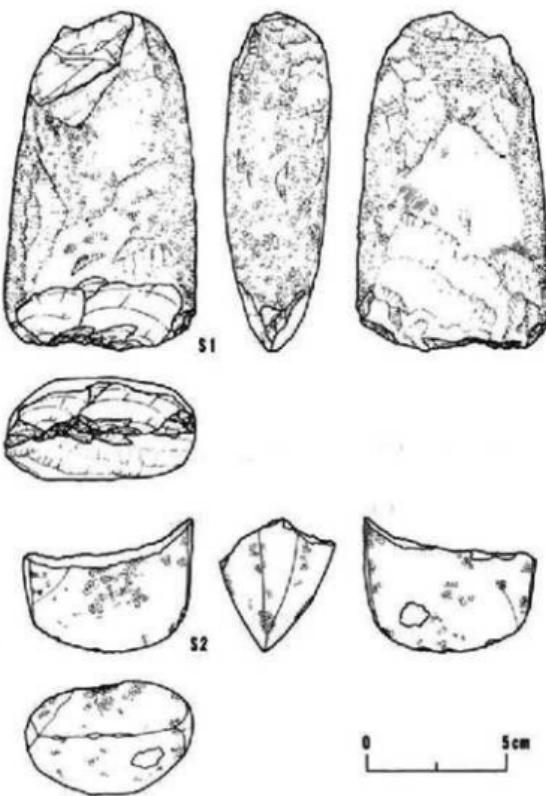


図21 石斧

A18はやや上げ底気味である。外面は縱方向のヘラ磨き、内面は1cm位の単位の縱方向のナデが行われ、底部はナデが行われている。A19も外面は縱方向のヘラ磨き、内面は縱方向のハケが施されている。ヘラ磨きの単位は5~7mm位である。A20は器壁の剥離が著しいが、外面は縱方向のハケ目調整が行われている。底部に近い部分は2.7cmと厚く作られている。A21~A23は全面器壁が磨滅しており、調整を観察できない。A22の底部は上げ底気味に作られている。

時期は、弥生時代中期後半から後期に属するものと考えられる。

### 2. 石器 (挿図21 S 1・S 2)

S 1・S 2の両者とも第20層の包含層から出土している。

S 1は凝灰岩製の磨製石斧で、淡青灰色をしている。刀部は使用の際に剥離している。表面とも研磨痕が認められるが、両側面は細かな敲打痕がみられ、研磨は行われていない。基部には節理面が未調整のまま残されている。円形住居跡内の地山直上で出土しており、住居跡に伴う可能性がある。重量461g。

S 2は、朝来郡和田山町周辺でとれる風化細粒花崗岩を石材としている。刀部のみの出土であり、全面研磨されている。重量103g。

### 3. 墓輪 (図版14~20、挿図23~26)

岡田2号墳周濠部出土の埴輪は、整理箱5箱分出土しているが、多くは部分的な破片で全体を復原しないが、円筒埴輪で普通円筒と朝顔形埴輪がある<sup>11</sup>。図化したものは35点で、普通円筒33点・朝顔形埴輪2点がある。

#### (1)円筒埴輪・普通円筒

円筒埴輪の全体像を考えるに長塚古墳採集の埴輪<sup>12</sup>を参照とする (挿図22)。

円筒埴輪の製作工程は復原による<sup>13</sup>と、①粘土紐巻き上げによる第1段(基部)の整形、②内外面をハケやナデによる調整、③タガの貼付、④粘土紐巻き上げによる第2段の整形、⑤調整、⑥タガの貼付……最後の段の整形・調整後にスカシ穴を鉄製小刀で割り抜くという順序である。又、新しい次期の埴輪には、一本の円筒埴輪が整形された後、上下を逆にして(基部)底部調整<sup>14</sup>がされるものがある。

次に、岡田2号墳出土の埴輪について製作工程の順に説明を行うこととする。

【整形】一輪2cmの粘土紐を右上がり巻き上げ、基部を整形する様子が挿図26・図版20で観察される。整形する粘土をのせる台の痕跡なども観察されることがある (H29・H30)。

【調整】外面調整は第1次調整としてタテハケ<sup>15</sup>を下から上へ施し、2段以上では第2次調整として連続的施文のB種ヨコハケ<sup>16</sup>が施されるH1・H7・H11がある。B種ヨコハケの原体幅は6.5cmと8cmで施文幅は4.5~5.5cmで施文方向は右から左である。内面調整はタテハケを主とするが、ナデやB種ヨコハケもみられる。

【タガ】断面の形状は、台形・M字形と三角形に近いものに分けられる。タガの幅は1.8~2.

5cmで、2cmのものが多い。高さは0.5~1.0cmで低いものと高いものに分れる。タガの貼付時に布などによるヨコナデを強く施すものと、下方のナデを緩くするため断面が三角形に近い形状を呈するものが出来る。タガ貼付の内面はユビオサエのため第1次調整のタテハケが消えるH2・H6や、ヨコハケを添加したH9がある。タガの貼付の位置を割り付けるためか、接着面を強固にするためか、沈線が引かれる。(H4・H5・H9)。

〔口縁〕 最後の段である口縁はやや外反りになるものH10・H12や、底部調整されるものは口唇が平滑になっているH11がある。外面の調整はタテハケを主とするが外反りとなるためナナメハケ気味のH10・H14と、B種ヨコハケのH11・H16がある。内部調整はナナメハケ、ヨコハケとB種ヨコハケに似た連続のタテハケH11がみられる。破片を復原すると口径30cm前後となる。

〔基部〕 (底部) 底部調整と考えられる外面のタタキ調整や底面にハケメがあるH26・H32・H34と基部調整の外面タテハケ、内面ユビナデやタテハケのみのものがある。復原すると底径20~30cmとなる。

〔スカシ穴〕 形状は○であるが正円ではなく、タガ間に2個のスカシ穴を穿つが、タガ間の中央部に正確に割り付けられてはいない。むしろ、上下どちらかに寄り、タガ幅の端でスカシ穴の割り抜きによる、粘土の動きがみられるH37・H40がある。

ところで、埴輪の焼成について岡田2号墳や長塚古墳の埴輪は無黒斑のもので、窓窯で焼成されたと考える<sup>7)</sup>。肉眼的には、須恵質埴輪と呼べる埴輪は少ないがH1・H6・H31・H42・H45がある。

胎土は、化学的な分析を第4章第4節にて安田博幸先生他が論考されるように2分類できる。色調は、窓窯焼成のため窓内部での焼成位置で異なる要素も加味されるが、土色粘<sup>8)</sup>によるHue 7.5YR 浅黄橙・黄橙が主で、Hue 5YR 淡橙やHue 2.5YR 灰赤・Hue 10YR 灰白色が若干ある。

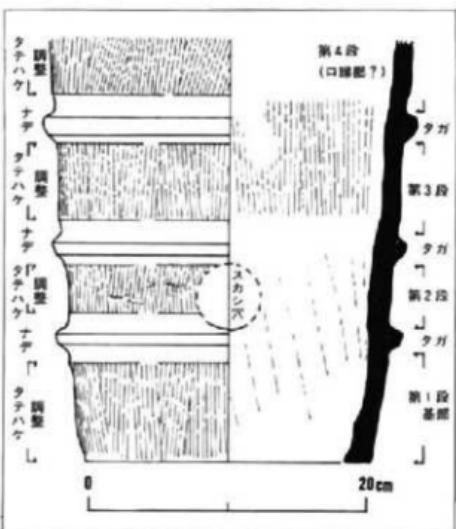


図22 長塚古墳出土の円筒埴輪  
（岡田2号墳）

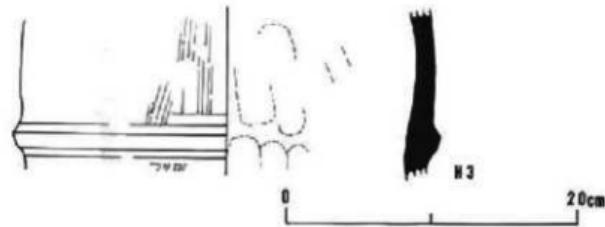
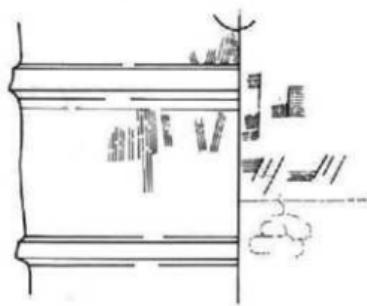
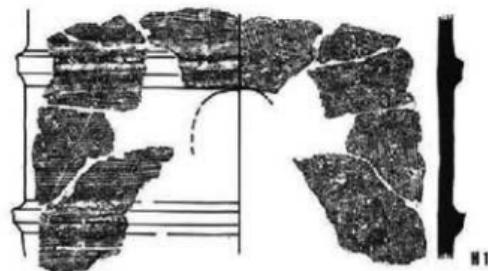


图23 岡田2号墳出土埴輪(1)

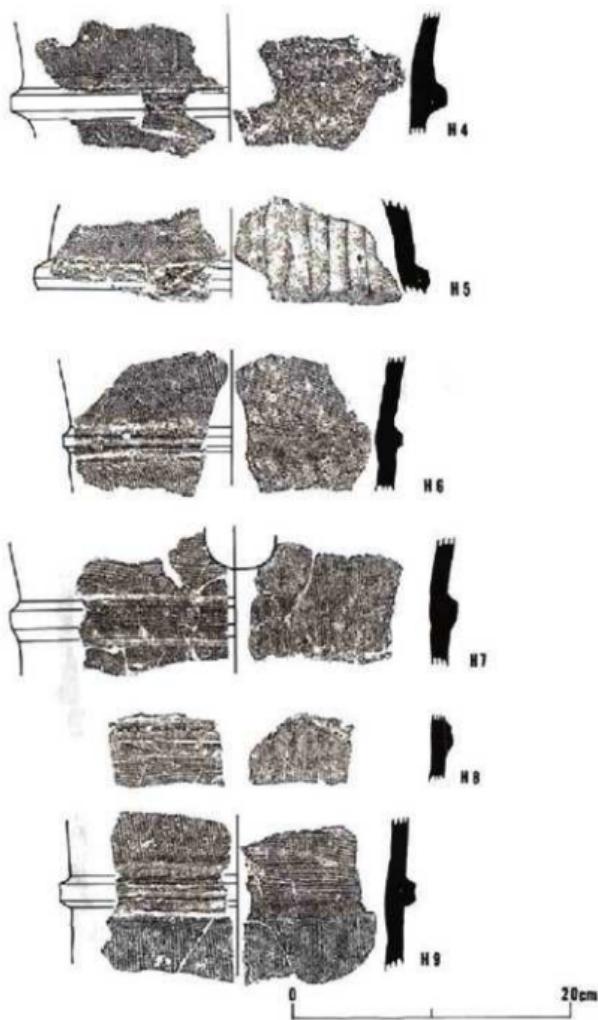


图24 周田2号坑出土埴輪(2)

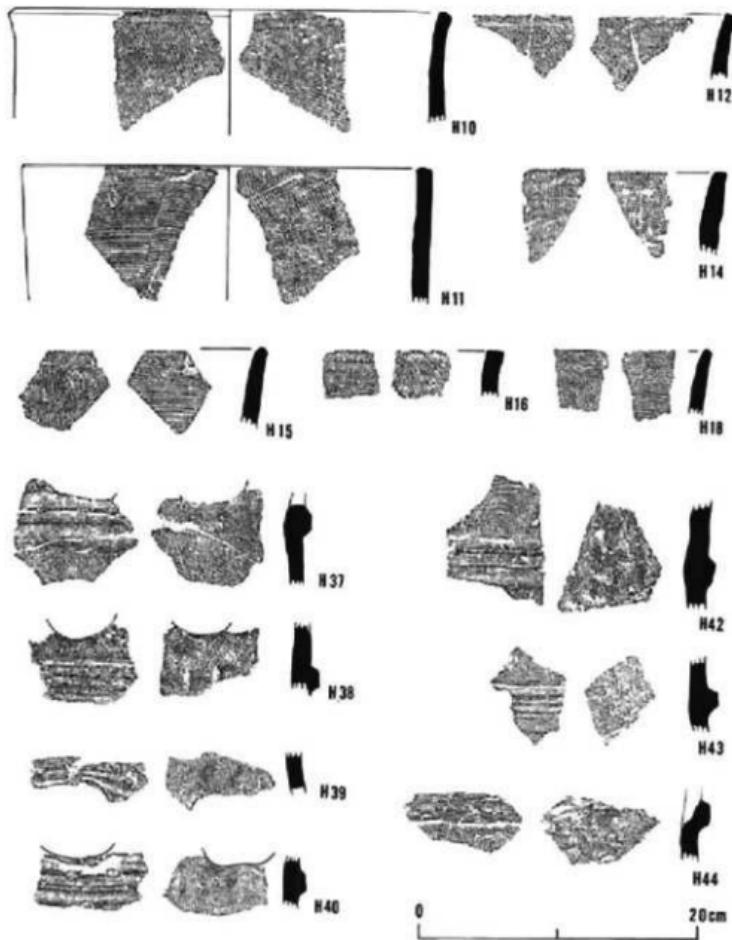


图25 同田2号墓出土埴輪(3)

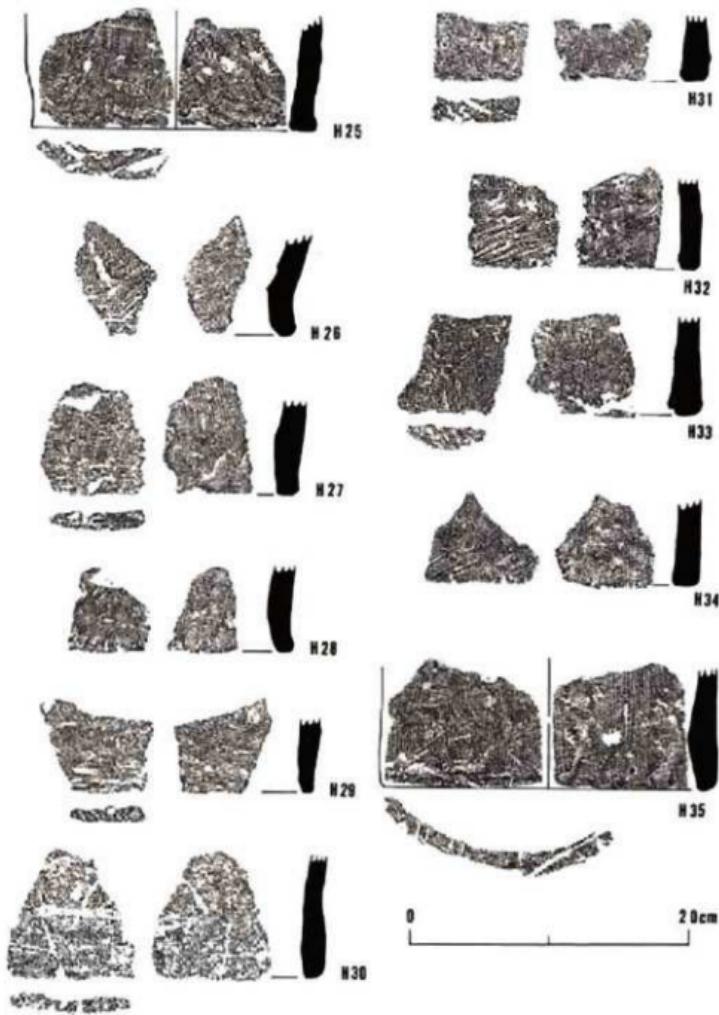


图26 西田2号坑出土陶器(4)

## (2) 朝顔形埴輪

朝顔形埴輪の形態を復原することは不可能であるが、池田古墳<sup>1)</sup>などの出土例から、H 4 は口縁部、H 5 は円筒部から口縁部に移行する肩部にある。H 4 はタガの形状は台形となり、幅 2.5cm、高 1.0cm としっかりしており、貼付時の割付線も施され、またヨコナテにより強固に貼付される。H 5 は、肩部を丸く造り出すため、内面はユビで削り気味に強くナデ調整しており、外側は球形に対してナナメハケを施す。

## (3) 小結

円筒埴輪は、H 1・H 11・H 25・H 35などを合成すると、4段のタガと2段のスカシ穴を複数し、底径 20~30cm、口径 30cm、高さ 50cm 近い埴輪となり、B種ヨコハケの第2次調整を施す。ただ、他の破片では外側の第2次調整を省き、底部調整を施す新しい傾向の埴輪も出土している<sup>10)</sup>。タガの形状変化・省力化などからも伺える。

川西宏幸氏の円筒埴輪編年によると、但馬の埴輪は資料が少なく、論究されていないが、窯窓焼成などの要素も含め、IV期・V期のもので、5世紀末から6世紀初頭の次期を与える。

第4章で、南但馬の埴輪文化の伝播や胎土の化学的分析などの論考があり、他の古墳出土の埴輪を比較検討しているので、細部については後論に譲ることにする。

## 註

- 1) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2、1978年の分類による。
- 2) 山本多津子氏採集資料を復原したものである。
- 3) 1) の文献や、春成秀爾・赤塚次郎・吉田恵二各氏による埴輪製作の復原的研究がある。
- 4) 1) による。
- 5) 板の櫛状工具による施文で、木目が 4.5/cm、5.6/cm、7.8/cm と数えられる。
- 6) 板の櫛状工具による施文で、木目が 4.5/cm、7.8/cm が数えられ、タテハケと原体を異なるものがある。
- 7) 1) によるが、胎土の化学的分析においても須恵器とは異なるデータがある。
- 8) 農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』1970年による。
- 9) 横本誠一他「城の山・池田古墳」1972年、和田山町教育委員会
- 10) 1) による。

## 4. 古墳時代及び平安時代の土器

古墳時代及び平安時代の土器として、土師器・黒色土器・須恵器が出土した。出土した土器は少量で、細片が多く団化し得たものは少ない。以下、各々種類に分けて述べる(図版13、挿図27)。

### (1)土師器 (B 1 ~ B 3)

墳丘盛土から甕・高杯が出土した。

B 1 は甕の口縁部片である。出土した 2 片は接合しないが、同一個体である。口縁部はやや内側し、端部を丸くおさめ肥厚しない。口縁部に内外面ともヨコナデを施す。胎土に砂粒を含み、浅黄橙色を呈する。復原口径 10.7cm。

B 2 は高杯の脚部である。脚柱部から強く外方に屈曲し脚裾部に至り、端部で若干そり上がる。表面の剥離が著しいが、脚裾部外面の中央に刷毛目を施している。胎土は比較的精良で、焼成も良く、橙色を呈する。脚裾部径 8.6cm。

B 3 は 4 区の落ち込みの上層から出土した土師器碗である。底部と体部の境でやや屈曲して立ちあがる。底部の切り離しは不明である。内外面とも表面の剥離が著しいが、両面にヨコナデが見られる。淡黄色で、胎土は砂粒を多く含む。底径 6.5cm。

### (2)黒色土器 (D 1)

3 区の包含層から碗の底部片が 1 点出土した。平高台で、高台側面に調整は見られない。内外面の調整、底部の切り離しは不明である。内面のみ黒色化している。胎土は比較的精良であるが、焼皮はやや甘い。復原高台径 6.4cm。

### (3)須恵器 (C 1 ~ C 7)

C 3 が 1 区の落ち込み上層から、C 4 が墳丘盛土から、C 7 が 2 グリッドから出土した。その他は古墳周濠上面から出土した。器種としては杯・碗・甕がある。

C 1 は碗の口縁部で、内外面とも回転ナデを施し、端部近くの外面をやや強くナデする。復原口径 11.2cm。

C 2 は杯の底部片で、底部から体部にかけて丸みをもって緩やかに立ちあがる。内外面とも回転ナデを施し、底部外面はヘラ切りの後、ナデしている。復原底径 10.5cm。

C 3 ~ C 7 は甕の体部片である。

C 3 はやや粗い外面平行叩きを施し、内面は同心円の叩き目が見られる。

C 4 は他のものと色調が異なり、内面は暗青灰褐色、断面は褐灰色を呈する。胎土は精良、焼成良好で器壁も薄い。外面にやや細かい平行叩きを施し、内面は同心円の叩き目を丁寧にナデ消している。

C 5 は外面平行叩きを施し、内面にナデを施すが、同心円の叩き目は残っている。

C 6 は外面平行叩きの後カキ目を施し、内面は同心円の叩き目をナデ消している。

C 7 は器壁が 1.5cm と厚く、粗い外面平行叩きを施し、内面は同心円の叩き目が見られる。

以上、各出土遺物は、その特徴から、B 1 ~ B 2 • C 4 • C 5 • C 6 が古墳時代後期初めに、B 3 • D 1 • C 1 • C 2 • C 3 • C 7 が時期幅があるものの、概ね平安時代に比定できる。

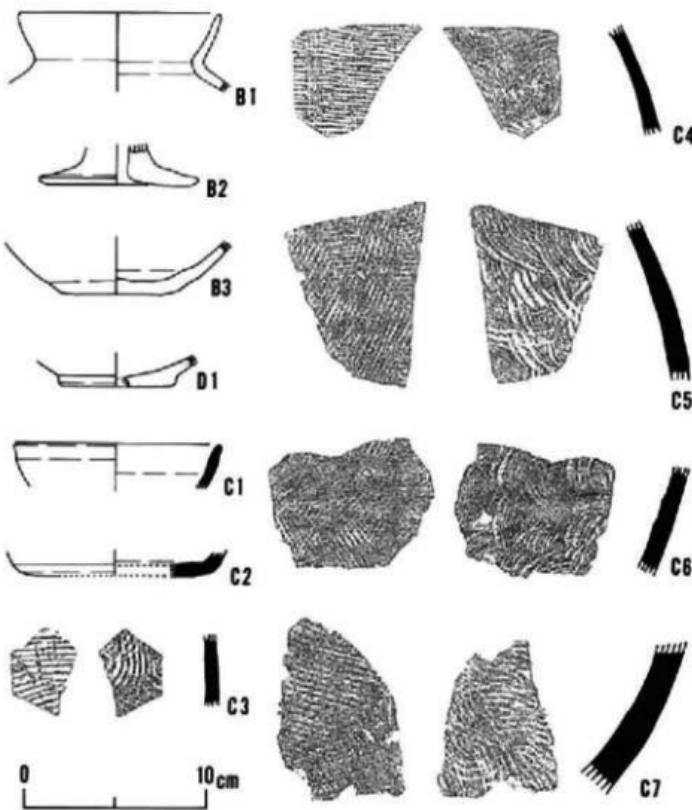


図27 古墳時代及び平安時代の土器

## 第4章 まとめ

### 第1節 弥生時代住居跡の復原

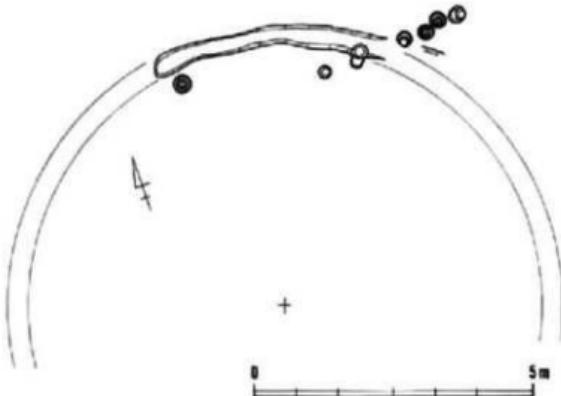
第1次調査で検出した東側の溝は南に開く弧状をしている。この溝を円形住居跡の周壁溝の一部と想定し、住居跡の規模を復原してみたい。

溝を検出した地山面は、水平距離10mで40cm下がる東向きの緩斜面であるが、傾きが緩やかであるため、造構平面図をそのまま使用しても大勢には影響がないと考えられる。

復原の方法は、溝の外側の肩のラインを円弧と見て、この円弧上にある任意の2点の垂直二等分線を引く。任意の2点を変えることによって無数の垂直二等分線が引け、その交点を円弧の中心点とするものである。現実には、溝のラインが完全な円弧ではないので、交点が1つに定まらない。得られた値は半径が4~6.2mとなるものである。半径が4m以下では溝のラインよりも小さな円弧しか得られないため、半径が4m以下ということは考えられない。また逆の理由で半径が6.2m以上も遠さない。とくに東端部分を含めると、復原径が非常に大きな値をとるため、東端は省くこととした。その結果、半径を5m位にすれば現状に近いものがえられることが判明した。従って周壁溝の外側のラインは、半径5m前後の円弧の一部で、円形住居跡の規模は直径10m前後である

ろうと思われる。

なお住居跡内で検出された柱路2個が周壁溝の内側に立てられたものと仮定すると、この住居跡には9~10個あると推定される。



挿図28 弥生時代の復原住居跡

## 第2節 岡田2号墳の復原

まず岡田2号墳の墳丘については、武庫川女子大学考古学研究会発行の「但馬の古墳II 岡田古墳群測量報告」(1974年)によると、方墳の可能性も指摘されている。しかし方墳とした場合、今回検出した周濠は方形部のコーナーにあたるのに、周濠は弧状をしており、墳形と周濠の形が異なることになる。従って方墳よりも円墳と考えた方が良いと思われ、以下の復原は円墳であることを前提として行っていく。

第2次調査で検出した周濠は小範囲であるので、前節のように円弧の垂直二等分線を使った方法で周濠の大きさを復原するのは、誤差が大きくなるので使用できない。

現存する墳丘の墳頂には幅1~1.5m・長さ8mの東西に長い落ちこみが認められる。その西端には、石室の天井石に使用されるような長さ2mもある石が露出している。この落ちは、埋葬

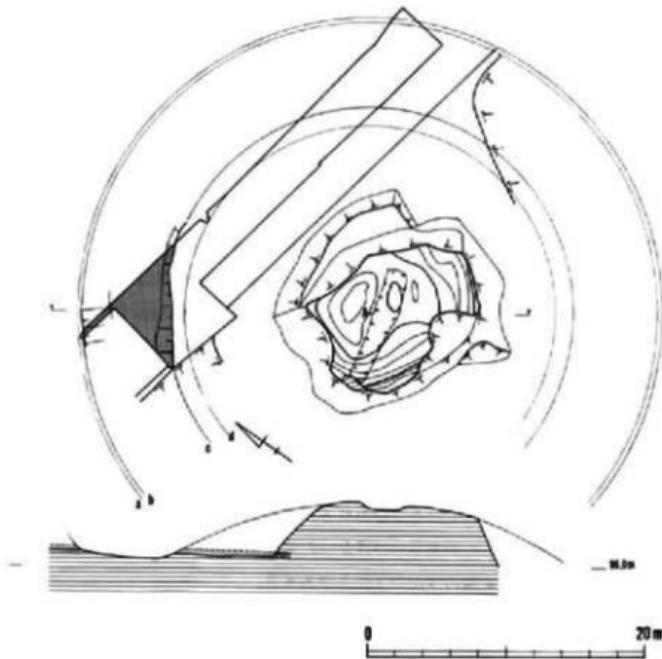


図28 岡田2号墳墳丘復原(1)

施設の天井部が落ち込んだために生じたものと考えられる。また現況の等高線図を見ても、古墳の中心がこの落ちの中央付近であると考えられた。従って周濠の肩のラインにあう円弧の中心を、図面上でコンパスで円を描きながら求めていった。このようにして求められた点が挿図29の点Aである。

点Aを中心として、検出した周濠の外のライン通る円弧を描いたのが、弧bと弧cである。弧bの半径は20.6m・弧cの半径は14.6mである。

点Aと検出した周濠を通る断面をみると、挿図29下の横線部分のようになる。

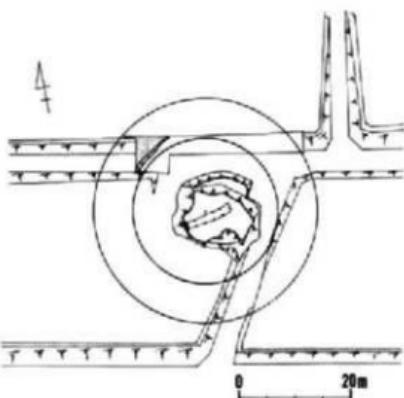
現墳丘以外の周濠及びその右の平坦面は地山のラインである。第3章第1節 第1次調査の中でも述べたように、岡田2号墳は弥生時代の遺物包含層の上に構築されている。従って墳丘の規模はこの包含層の上で考えねばならない。

挿図11から遺物包含層の厚さを約20cmと見なすことができる。挿図29の断面の中で網掛けを行っているのは、弥生時代の包含層を推定復原したものである。同様に周濠の外側についても同様の復原を行った。周濠の立ち上がりをこの包含層の上まで延長し、その上端を半径として描いた円弧が、弧aと弧dである。弧aの半径は21m・弧dの半径は13.2mとなる。

以上の作業から、周囲に幅7.8mの周濠を持つ直径26.4mの円墳が復原できる。

挿図29の断面図で、周濠から墳頂にかけてのラインは、現在の墳頂の高さを生かした場合の復原である。古墳の直径に比べて高さが3.8mと低く、非常に偏平な古墳となってしまう。挿図34に見られるように、他の古墳と比べても偏平で、本来はもう少し高さがあった可能性がある。

岡田2号墳の周囲の現況図に復原を行ったものが挿図30で、ここでは弧aと弧dのみを図示している。古墳の周囲はすでに場整備を受けており、東側と西側については大きく削平されており、周濠はすでに破壊されていると思われる。南側についても同様であるが、地形が下がっているので、周濠が無かったかあるいは浅かった可能性がある。唯一周濠が遺存しているとすれば、第2次調査地区の北側の水田の下のみであろう。



挿図30 岡田2号墳(復原)

### 第3節 南但馬地域における埴輪文化の伝播

#### 1. はじめに

今まで見えてきたように、量的には少ないが但馬の埴輪を考える上で、貴重な資料を得ることができた。これまでに但馬地方の埴輪について述べられたものに池田正男氏の研究がある<sup>1)</sup>。

池田氏は但馬出土の埴輪を集成して丹念に観察し、概観することによって、養父・觀音塚古墳の位置づけを考えておられる。小論では、主に円筒埴輪を再検討することによって、南但馬地域における埴輪祭祀導入の意義を考えていきたいと思う。

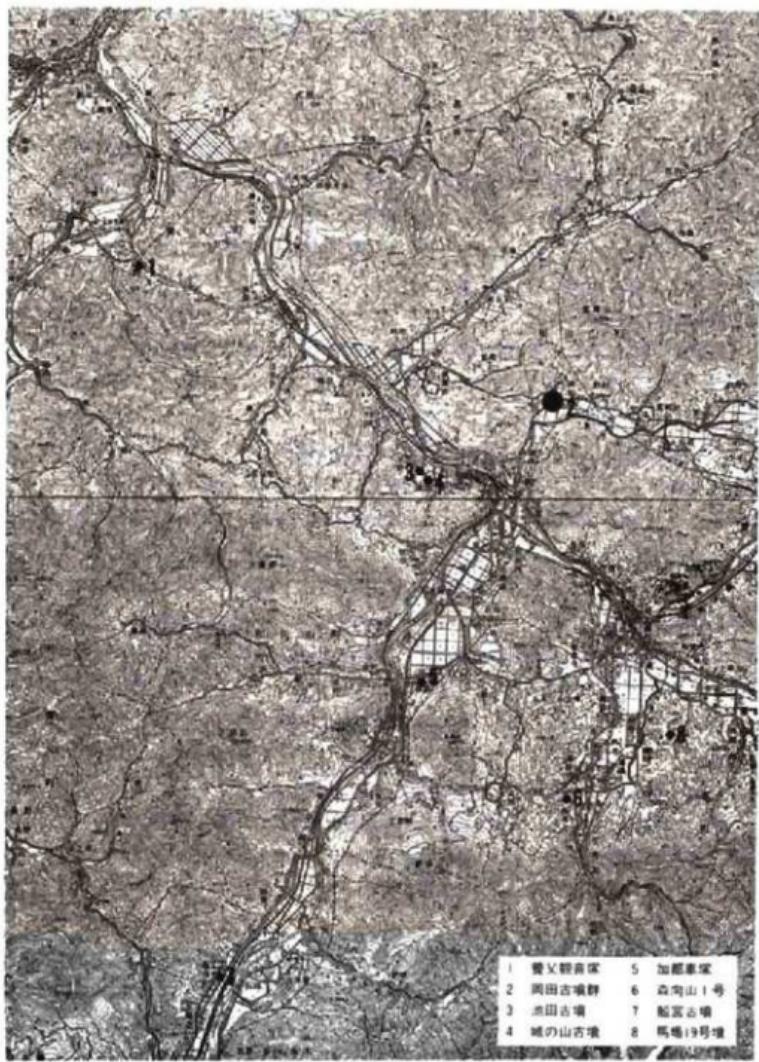
#### 2. 墓輪出土の古墳

**池田古墳** 和田山町にある但馬で最大・最古の前方後円墳で墳丘の全長が約141mになる<sup>2)</sup>。1971年に行われた調査で葺石と埴輪列が確認された。埴輪列は1段目テラスで回繞していたようだが、2段目以上は不明である。ただし埴頂部からも出土しており、主体部を方形に回繞していた可能性がある。出土した埴輪には円筒・壺形・形象がある。そのうち、円筒埴輪はタガが断面台形でしっかりとおり、外面調整はタテハケだけのものと後からヨコハケを加えるものがある。いわゆるB種ヨコハケ<sup>3)</sup>ではない。色は黄褐色で黒斑を持つものを含む。円筒埴輪自体、全体を復元できるものがないが、底径から考えるとさほど大きいものではない。形象埴輪には家・蓋がある。この古墳の時期は埴輪から考えて、5世紀中～後半と思われる。

**船宮古墳** 朝来町に所在する但馬2番目の前方後円墳で、墳丘全長86mを数える<sup>4)</sup>。2回にのぼる周濠の調査により、埴輪資料が増加した。墳丘の調査はまだされていないが、周濠の墳丘とは反対側（外側）の斜面に貼り石が施されていることがわかっている<sup>5)</sup>。埴輪は円筒が多いが、蓋・盾も含まれている。円筒埴輪はタガの断面が台形のものが多く、M字形も含まれる。外面調整はタテハケだけのものと、タテハケ後B種ヨコハケのものがある。量的には後者が多い。黒斑は見当らない。埴輪からみた時期は5世紀後半～末であろう。

**森向山1号墳** 山東町に所在する古墳で、以前から表探として埴輪が採集されていたが、近年開発に伴って調査が行われた<sup>6)</sup>。直径16mの円墳で、主体部は削平されていたが、周濠から埴輪が多く出土した。円筒埴輪はタガの断面が低いM字形であり突出しない。外面の二次調整はB種・C種ヨコハケを用いる。黒斑を持たない。時期は5世紀末～6世紀初めであろう。

**岡田古墳群** 和田山町に所在する。約60mの前方後円墳である小丸山古墳、同じく長塚古墳を中心にして、数基の古墳が聚かれている<sup>7)</sup>。埴輪は今回調査した岡田2号墳以外、採集資料だけで量的には少なく全体がわかるものはほとんどない。そのうち、長塚古墳から出土した円筒埴輪は、タガが断面台形でしっかりとしているものの、外面調整では二次調整が既に省略されていて、形骸化をとどめている。黒斑はなく、須恵質を呈する。青塚古墳（東墓）の円筒埴輪はタ



地図31 南但馬地域における埴輪出土古墳位置図 (1/25,000)「但馬竹田」「出石」

がが低く、外面調整は二次的にヨコハケが残る。黒斑の有無は小破片のためわからない。これらの古墳は概して6世紀に入ってからのものであろう。

**加都車塚古墳** 和田山町に所在する。直径20mの円墳で主体部は横穴式石室であると思われる。樹立された状態は不明だが、円筒埴輪が採集されている<sup>10</sup>。それによると、タガは断面が台形で突出度は小さく、外面の二次調整はヨコハケのものと省略されているものがある。黒斑はない。6世紀前半以降と思われる。

**賀父・觀音塚古墳** 賀父町に所在する。27×23mの楕円形の円墳で主体部は竪穴系横口式石室である。埴丘南部に円筒埴輪が立てられていた<sup>11</sup>。出土した埴輪は円筒だけである。復元によると底径が25~30cmのものが多く、この時期の他古墳の埴輪と比してもかなり大きい。しかし、つくりは粗雑感を否めない。タガは断面が台形のものと三角形のものがあるが、共にそれほど突出しない。外面調整はタテハケだけで終えるものと、その後B種ヨコハケを施すものとがあり、量的には前者の方が多い。黒斑は有しないが、須恵器と言えるほど焼成は良くない。全体がわかるものがないので確実に言えないが、おそらくタガが3本ないし4本、4段ないし5段構成と思われる。築造時期は出土した須恵器より6世紀前半で、6世紀後半に追葬が行われている。

### 3. 南但馬地域における埴輪文化の伝播

前述のように南但馬地域で埴輪文化が導入され、展開していく過程にいくつかの段階があることが読みとれる。このことを畿内政権と南但馬地域の首長との関係に結びつけて考えてみたい。

埴輪については外面調整・タガの形状・焼成に注目したい。内部調整はその施行の違いが時期差を表しているとは思えないので触れないことにした。

**Ⅰ期** 副葬された遺物に畿内的な要素を持つもの（鏡・石製模造品）が見られるが、墳形や主体部の構造にはまだ在地色が強く残存する時期。和田山町城の山古墳<sup>12</sup>・山東町馬場19号墳<sup>13</sup>が挙げられる。墳形は円墳であり（城の山古墳は36×30m、馬場19号墳は約15m）、主体部も木棺である。まだ埴輪は導入されていない。遺物としては城の山古墳から三角縁神獣鏡を含む鏡6面、石製合子・石調・琴柱形石製品が出土している。また、馬場19号墳の第一主体部から方格規距鏡が出土している。この種の鏡の出土は畿内勢力との結びつきの強さを示すものであろう。話が横道にそれるが、南但馬地方ではまだ埴輪が見られないものの、北但馬地域では既に埴輪が導入されていた可能性がある。城崎町小見塚古墳がそれである<sup>14</sup>。円墳で粘土棺を持ち、埴輪が見られ、鏡が出土している。時期的には城の山古墳などよりも若干若いかもしれない。しかし、もし但馬地域全体を考えるにあたってはⅠ期と次のⅡ期の間にもう一段階考える必要があるかもしれない。だいたいの時期は4世紀後半～5世紀中頃である。

**Ⅱ期** 遺物に加えて、墳形・主体部の構造にも畿内色が入り、在地色が払拭される時期。す

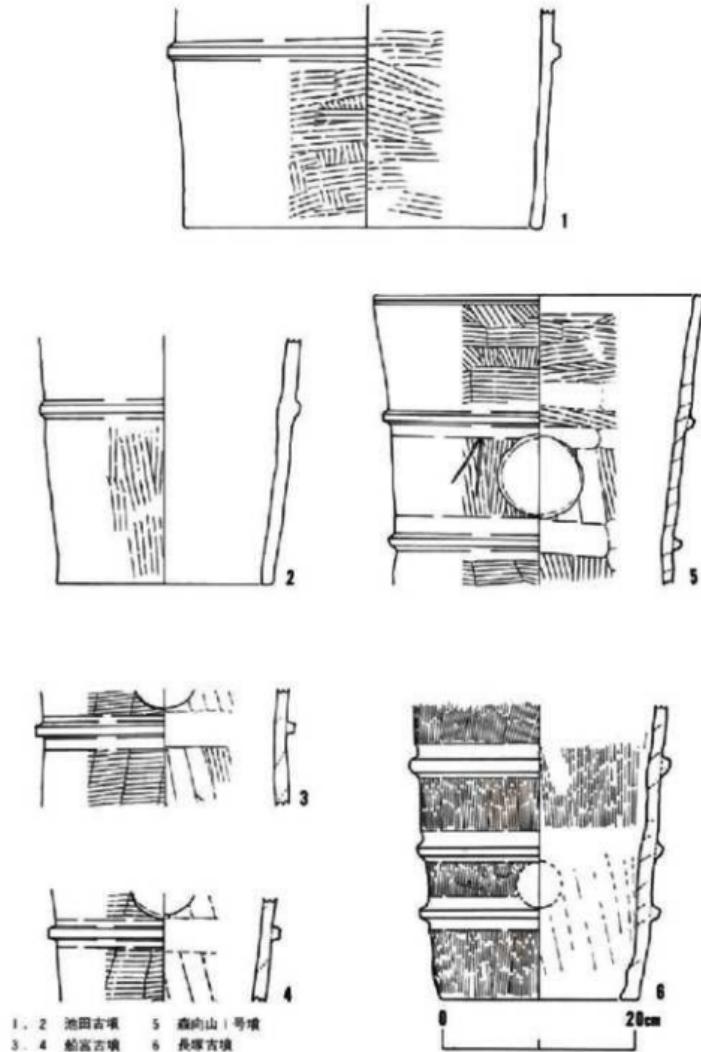


図32 南但馬地域の埴輪(1)

なわち、前方後円墳の出現、粘土構・豊穴式石室の採用、埴輪文化の伝播である。しかし、主体部はまだ木棺も少なくない。前述した池田古墳・船宮古墳が挙げられる。とともに周濠を合わせると100mを越える前方後円墳であり、主体部は不明だが(池田古墳は長持形石棺であった可能性がある)埴輪を樹立していたことは確実である。前方後円墳と埴輪の出現は南但馬地域がはっきりと畿内政権の勢力下に入ったことを示すものであろう。近藤義郎氏は前方後円墳出現の意義を、諸首長が共通の墳墓形態、墳墓祭祀を持つことで広汎な結合が生まれ、同時に較差をもって普遍化するものと把えている<sup>13)</sup>。大きさは違えども同一の首長靈廟承儀礼を持つことによって、畿内政権の一員としてその傘下に入ったといえよう。埴輪の製作からみると、外側のタケハケを施した後の二次調整として、A種ヨコハケ・B種ヨコハケの一般化がみられる。特に船宮古墳ではB種ヨコハケだけで定型化している。タガは断面が台形もしくはM字形で突出度は高い。また、有墨斑と無墨斑があり、このⅠ期の中で焼成方法が転換されていったのである。川西宏幸氏の編年でⅢ～Ⅳ期にあたり、5世紀中頃～末頃と思われる。

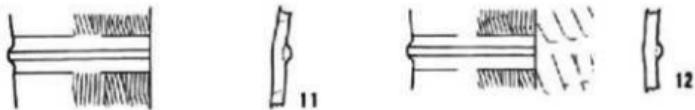
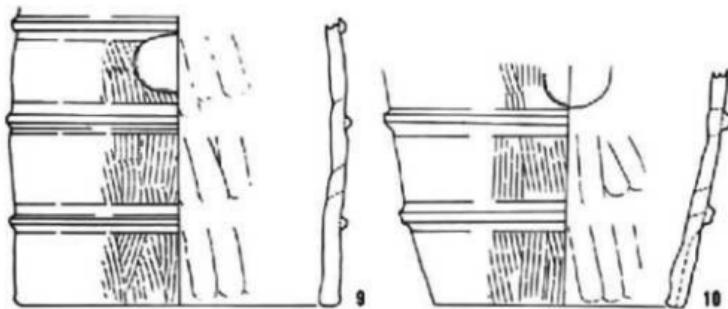
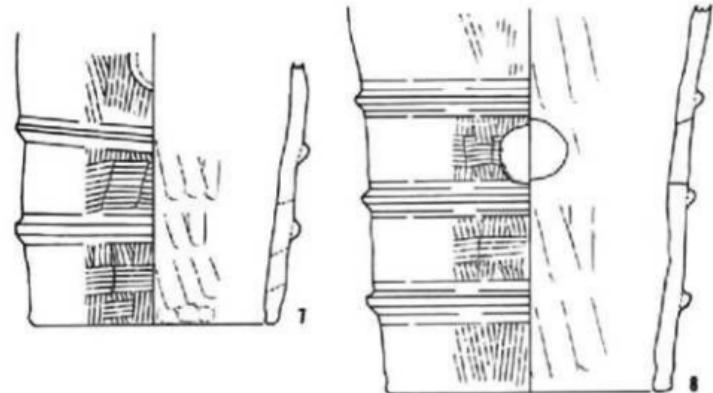
Ⅲ期 10～20mの規模の小さい古墳にも埴輪が導入される時期。前方後円墳はまだ築造される。古墳の数が増加していくが、主体部は依然として木棺が多い。前述した森向山1号墳、岡田古墳群が挙げられる。ただし、岡田古墳群の一部はもう少し時代が新しくなる。埴輪の特徴について見るとほとんどⅠ期と変わらない。ただ黒斑を持つ埴輪は全くなく、害窓で焼成されたものといえよう。また、外側の二次調整としてのヨコハケが省略される兆しも見える。このⅡ期の時期は5世紀末～6世紀初頭以降と考えられる。

Ⅳ期 主体部に横穴式石室が導入され、なおかつ埴輪と共に存する時期。南但馬地域では前方後円墳は消滅し、小規模の古墳の数が増していく。前述の加都車塚古墳、觀音塚古墳が挙げられる。埴輪を見てみると、Ⅰ期・Ⅱ期とさほど差異があるのでない。ただ、焼成は全て害窓でタガのつくりや外側の調整には粗雑な感を受ける。Ⅲ期の時期を考えてみたいが、加都車塚古墳の年代は横穴式石室の可能性と埴輪の存在から、少なくとも6世紀前半に収まるもので、それ以降に下らないと考えたい。また、觀音塚古墳の年代は須恵器から6世紀前半に築造され、6世紀後半に追跡が行われたとある。埴輪の樹立状況から築造時に立てられたと理解してよい。これらのことから、Ⅳ期の時期は6世紀前半から中頃には収まるものと思われる。こうして考えると、Ⅲ期とⅣ期は一部併行していたとも思え、Ⅲ期として含めている古墳の中にはⅣ期であるものが含まれている可能性もある。

Ⅴ期 墳形は円墳、主体部は横穴式石室で埴輪は消滅した時期。古墳の数も群集墳というふうに爆発的に増加する。具体例は挙げないが、6世紀後半以降である。

#### 4.まとめ

今まで見てきたように、畿内から導入された埴輪文化が南但馬地域の古墳の中へ浸透していく過程を明らかにできた。ただし、ここで挙げた例は南但馬地域の古墳の数からすればほんの



7, 8, 9, 10 鶴又般音塚古墳  
11, 12 加藤車塚古墳



図32 南但馬地域の埴輪(2)

一部にすぎない。もちろん、後期の群集墳が全体のかなりの数を占めるものの、埴輪を持つ古墳は少ないと見えよう。このことから、この地域においては埴輪祭祀自体が普遍的なものとなりえなかつたと考えられる。しかし、今まで述べてきたように埴輪導入の流れをスムースに把えることができる。

古墳時代の但馬全体を考えるとき、南但馬地域は非常に重要な位置を占めると思われる。北但馬に埴輪祭祀の採用という点では遅れをとるが、最古・最大の前方後円墳が南但馬地域に築かれたことはまず南但馬地域から順に畿内政権の傘下に入っていたことを表すのであろう。埴輪の動向について簡述するつもりであったのだが、全く違った方向へいってしまったようである。今後、南但馬地域だけでなく、但馬全体で埴輪の出土例が増えることを期待したい。

#### 註

- 1) 池田正男・渡辺界「養父・親音塚古墳」1980年　養父町教育委員会
- 2) 横本誠一・山本三郎「城の山・池田古墳」　1972年　和田山町教育委員会
- 3) 川西宏幸「円筒埴輪論」『考古学雑誌』第64巻2号　1978年
- 4) 但馬考古学研究会「よみがえる古代の但馬」1981年
- 5) 朝来郡広域行政事務組合　田畠　基氏　1987・88年　調査
- 6) 田畠　基「森向山遺跡」「兵庫県埋蔵文化財調査年報」　1988年　兵庫県教育委員会
- 7) 武庫川女子大学考古学研究会「岡田古墳群測量報告」　1974年
- 8) 横本誠一・瀬戸谷啓「日本の古代遺跡　兵庫北部」　1982年　保育社
- 9) 1) と同じ
- 10) 2) と同じ
- 11) 山東町教育委員会「五反田・馬場遺跡群　現地説明会資料」　1988年
- 12) 4) 及び8) と同じ
- 13) 近藤義郎「前方後円墳の誕生」「岩波講座　日本考古学6」　1986年　岩波書店

尚、船宮古墳、森向山1号墳、加都車塚古墳の未公開資料の公表について、朝来郡広域行政事務組合　田畠　基氏より快諾を得ました。記して感謝します。

第4章第4節は  
公開していません

## 第5節 岡田古墳群について

岡田古墳群については、武庫川女子大学考古学研究会の測量報告を基準として、論述されてきた。東河地域の西端に位置し、和田山盆地を望み、岡田3号墳（野村1号墳）を除くと前方後円墳2基と円墳3基で構成される（第3表）。少しの埴輪の出土もあったが、墳形や立地などの要素から年代観を与えられていた。つまり、長塚古墳は墳丘が削平され、現在では復元が困難と思われる。周濠を持つ全長約70mの前方後円墳で5世紀代築造と古墳群中最古と考えられ、そして小丸山古墳は墳形などから6世紀代に築造された前方後円墳と位置づけられてきた。

一方、岡田2号墳は径10数mの円墳または方墳で、最小規模の古墳とされたいた。しかし、今回の調査では、幅7.8mの周濠を持ち、埴輪を繞らす、径約26.4mの円墳に復原されたことから、墳形では青塚古墳に近づく規模を有し、長塚古墳と同じく周濠を持つこととなる。そして、岡田小字兜塚に在り、地元では兜塚と呼称され“兜塚”にふさわしい規模を呈する。南但馬地域の埴輪の検討や胎土分析などから長塚古墳や青塚古墳より古い編年観を与えられるが、長塚古墳の周濠や規模の検討も含め、しかも岡田2号墳の調査が部分的であることから、岡田古墳群構造把握への作業段階として、岡田2号墳は5世紀末から6世紀初頭の築造年代を与え、今後の検討の機会を得つことにする。

最後に、岡田地区での小さな調査を実施するに地元の皆様の協力で、大きな成果を得たことに感謝し、今後とも岡田古墳群が下層の弥生時代の遺構群も含め保護されることを願い、まとめてかえる。

墳丘規模	墳丘高	墳丘基盤高	主体部	出土遺物	古墳の時期	備考
全長70m 前方部 幅40m 後円部径40m	9m	113m	?	埴輪	5世紀後半～?	周濠?
全長59m 前方部 幅21m 後円部径30m		106m	?	埴輪	6世紀初～前半	独立丘陵
径35m	5～6m	112m	?	埴輪	5世紀末～6世紀初	
径28m	5m	103m	?		5世紀末～6世紀初	
径26m～	5m～	98m	?	埴輪 須恵器、土師器	5世紀末～6世紀初	周濠
			横穴式石室		6世紀	

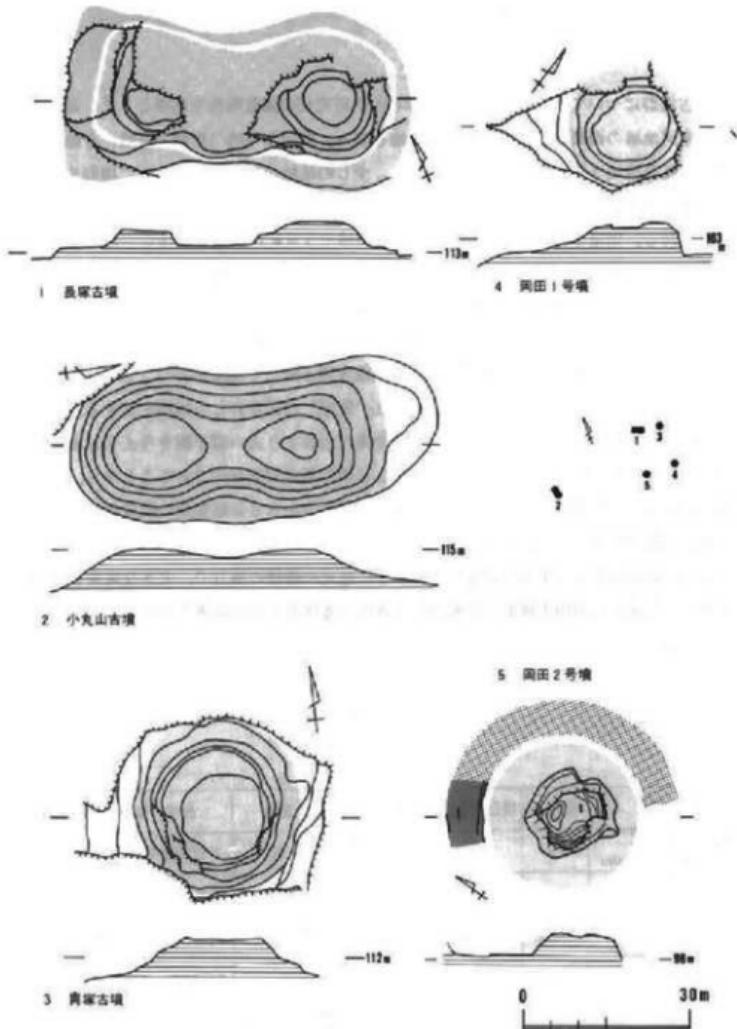
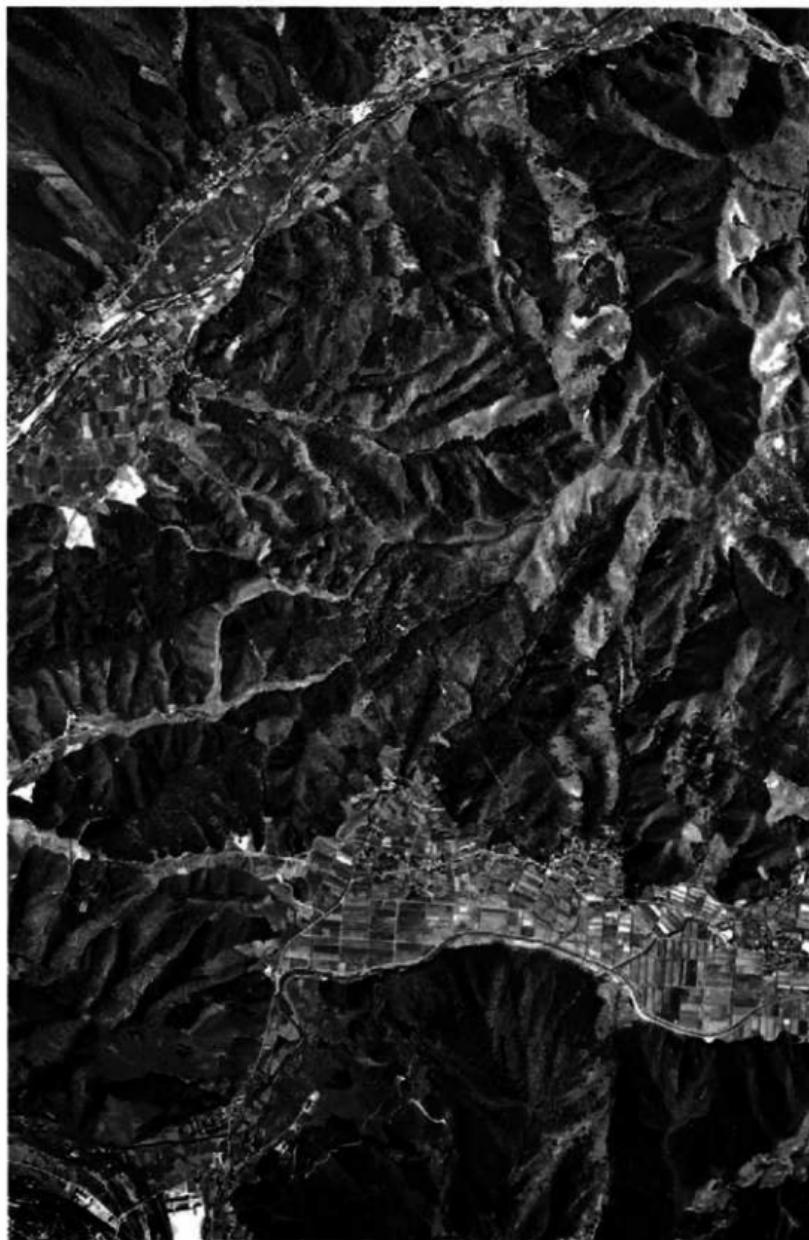


図34 岡田古墳群の墳丘

# 図 版

図版一 東河地域と岡田古墳群



(国土地図協会  
(KK-75-1X, C-16-3による)

図版二 岡田古墳群と岡田2号墳



図版三 岡田二号墳  
遠近景写真



小丸山古墳からの岡田2号墳遠景



岡田2号墳近景

図版四 調査前の墳丘の状況



上、横から 中、露出石 下、墳頂

図版五 第一次調査トレンチ



東からの近景

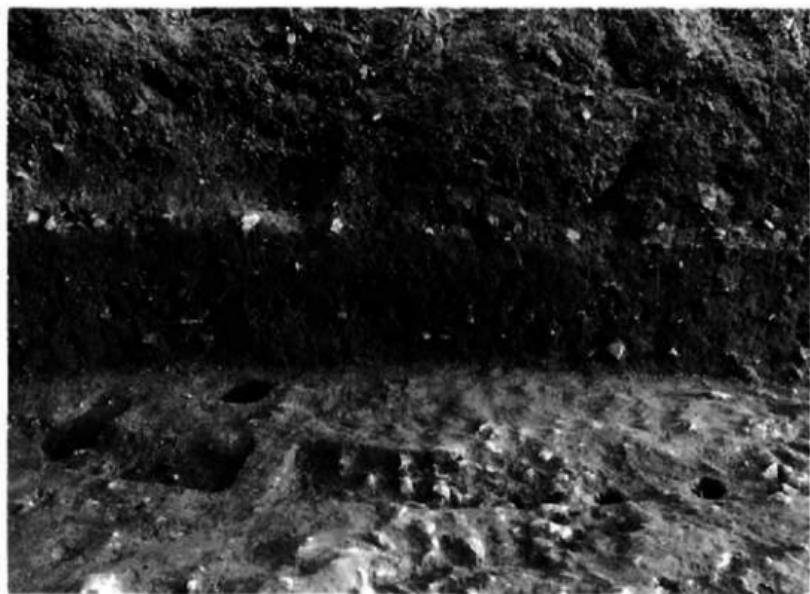


北からの近景

圖版六 填丘土層斷面



上、F-G断面 中、E-B断面 下、D-C, B-A断面



住居跡と土層断面



住居跡(填頂から)

図版八 第二次調査トレンチ



西から(周濠と墳丘)



東から



古墳の周溝、土層堆積



トレンチ土層断面

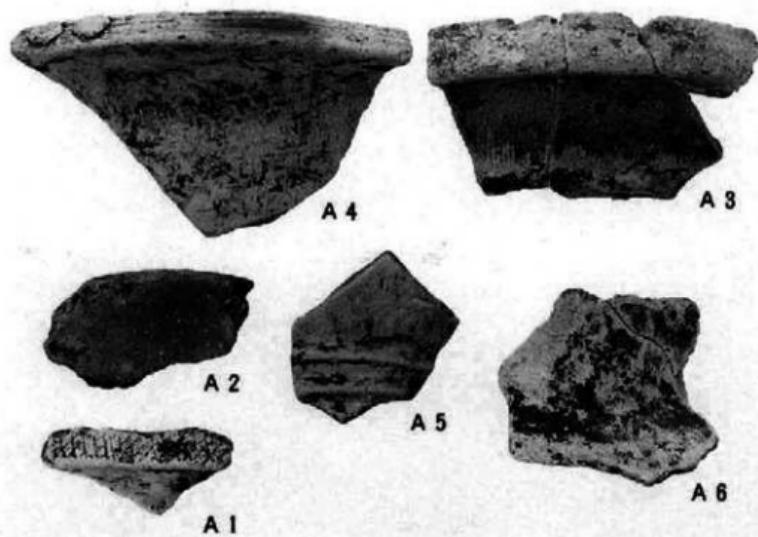


周濠(北東より)

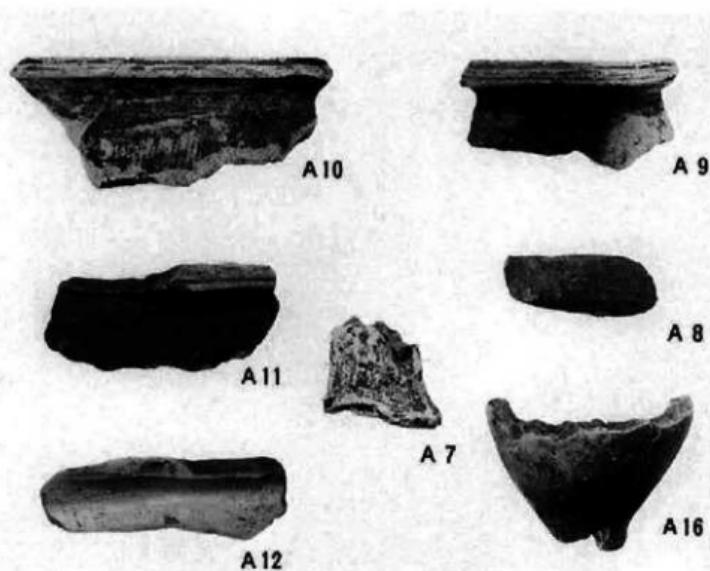


周濠(墳頂より)

図版一  
弥生土器

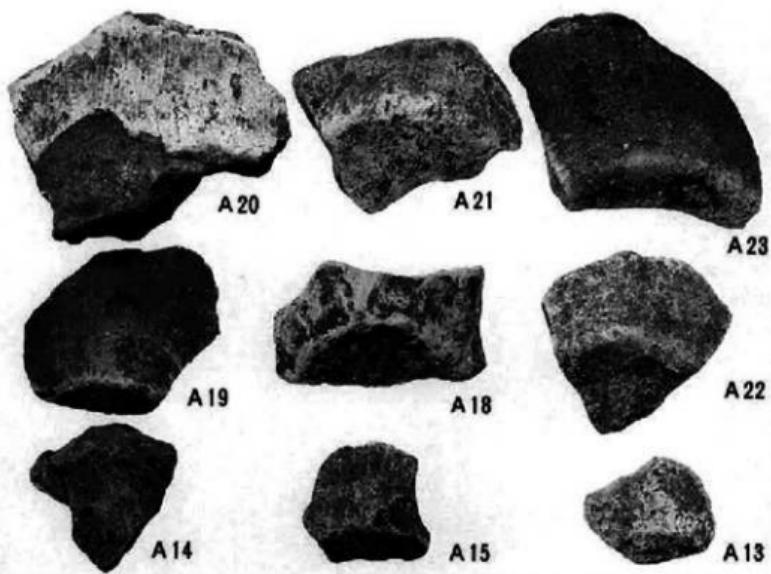


壹

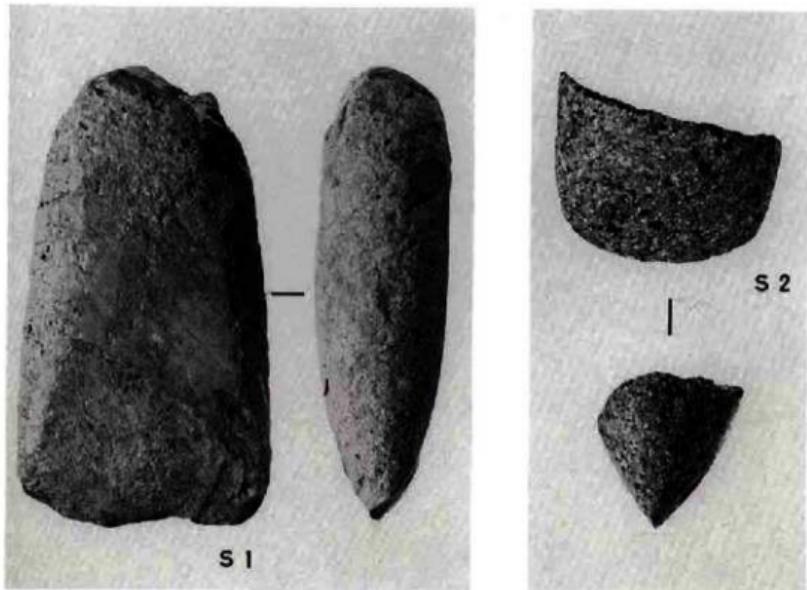


壹、高杯

圖版一二 弥生土器・石器



壹・甕底部



石斧

図版一三 古墳時代・平安時代の土器



B 1



B 2



C 4



C 6



C 5

土器器、須恵器



D 1



C 2



C 1



C 3



D 1



C 7

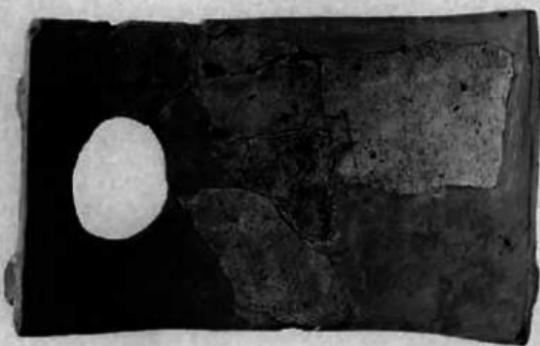
黒色土器、須恵器

図版一四 墓輪一 円筒埴輪



H1

長



H1

裏

図版一五 塗輪二 円筒埴輪



H 2

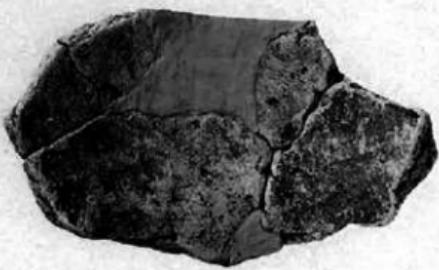


H 3

表



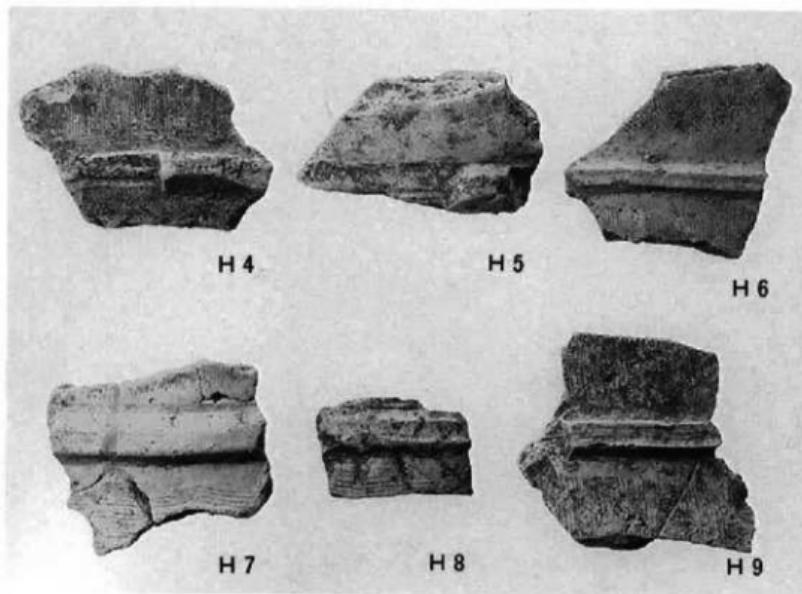
H 2



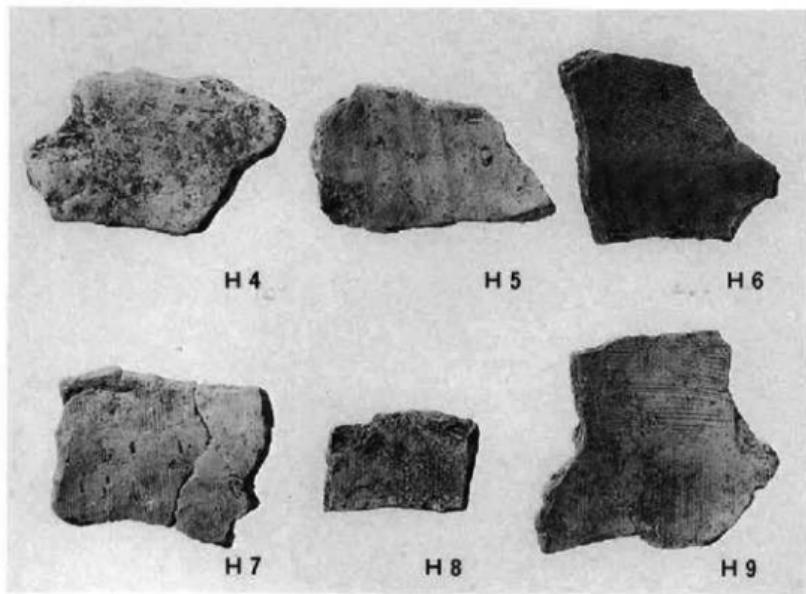
H 3

裏

圖版一六 墓輪三 朝顏形埴輪・円筒埴輪

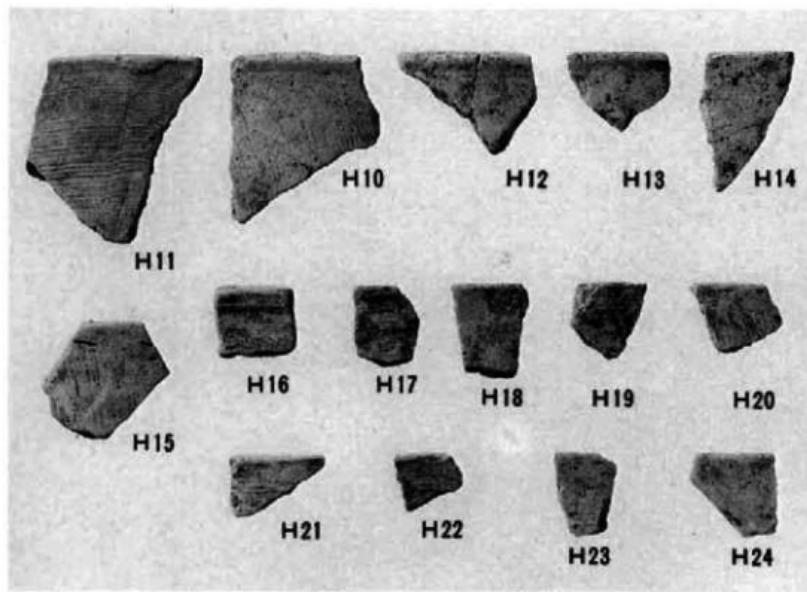


表

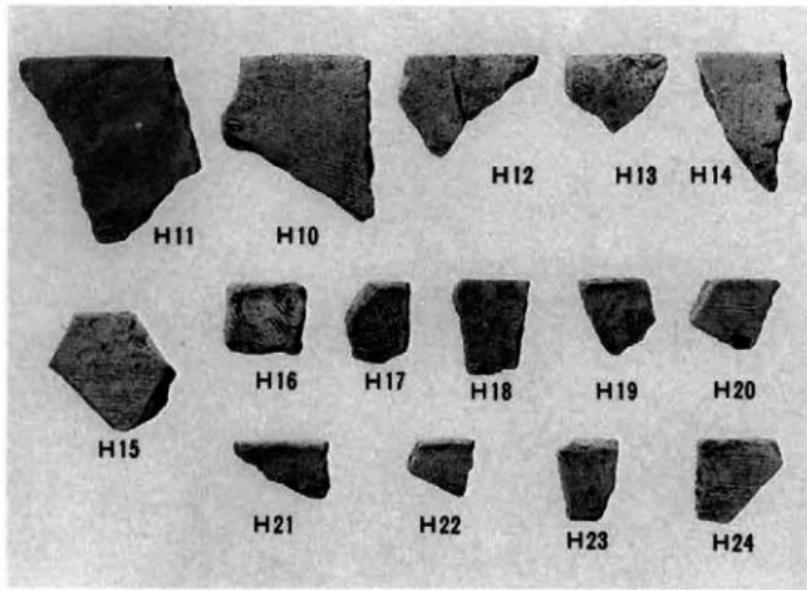


裏

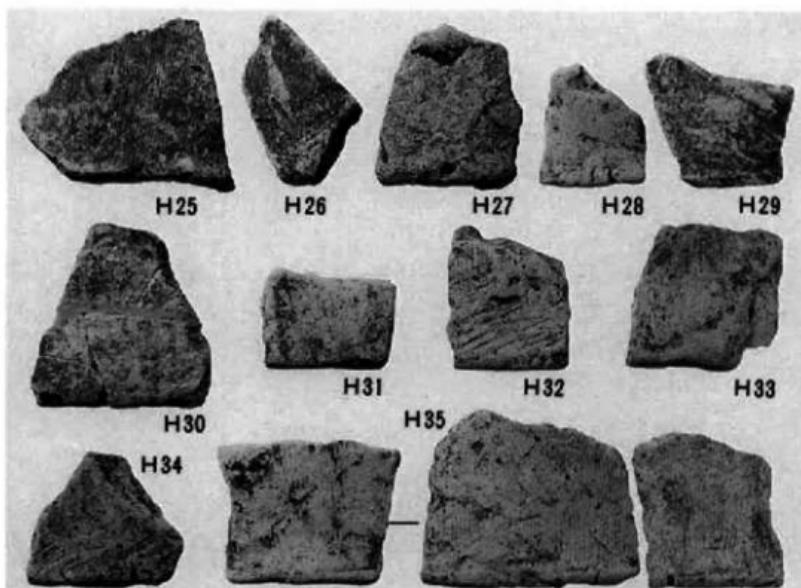
圖版一七 塵輪四  
圓筒埴輪(口緣部)



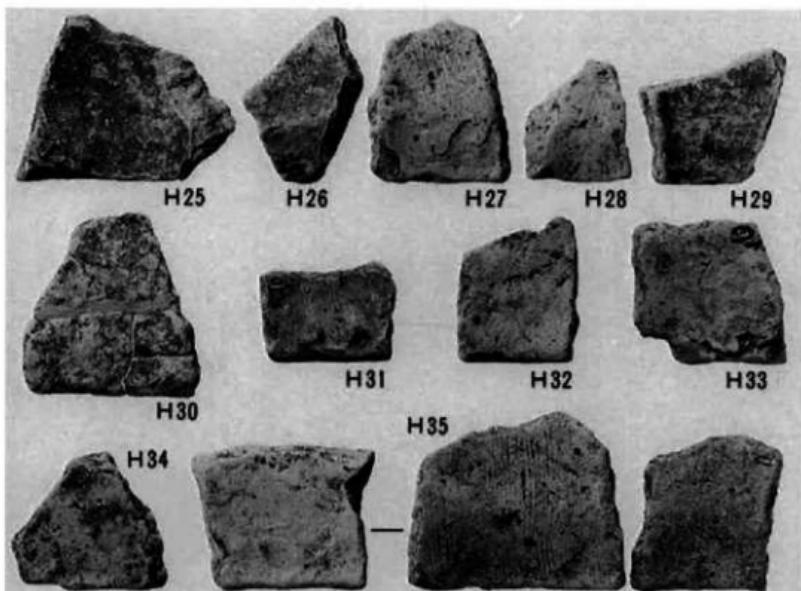
瓦



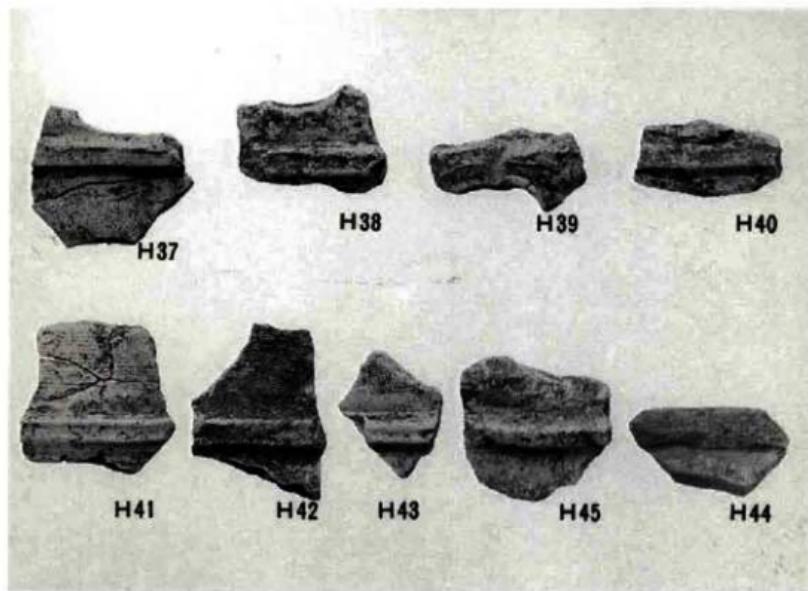
真



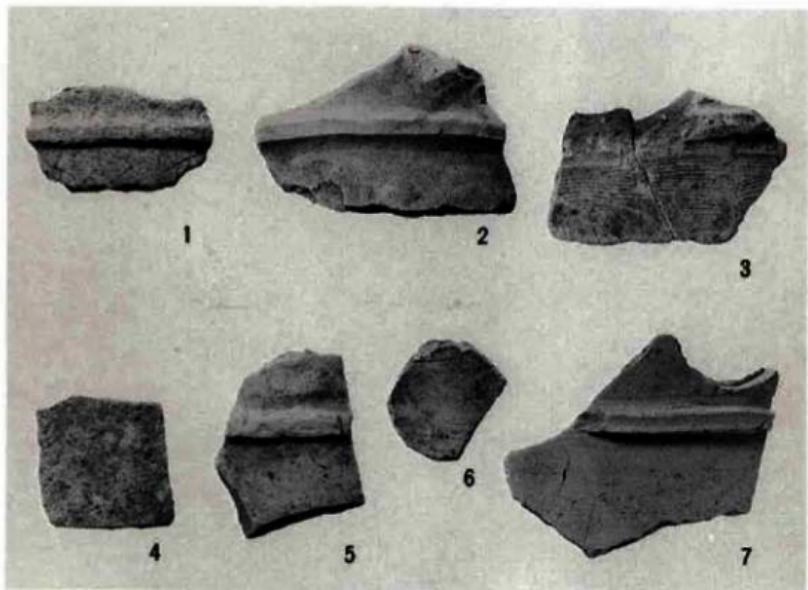
表



裏



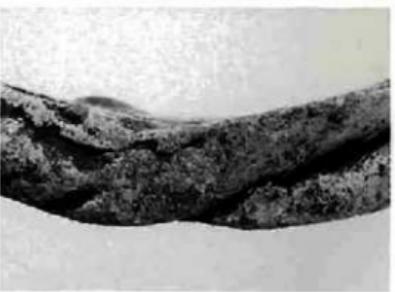
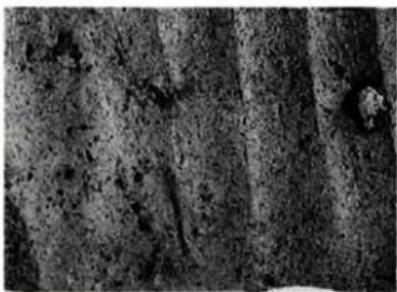
円筒埴輪(スカシ穴、B種ヨコハケ他)



周辺の埴輪 (1.池田古墳 2.加都車塚 3.養父・觀音塚古墳  
(4.小丸山古墳 5.長塚古墳 6.森向山1号墳 7.船宮古墳)



左上 B種ヨコハケ、左下 タガヒハケ、右上 タガヒハケ、右下 タガヒタテハケ・ヨコナデ



左上 ユビケズリ、左下 底裏タテハケ、右上 底タタキ、右下 紐造り

兵庫県文化財調査報告書 第68冊

岡田2号墳

平成元年3月20日 印刷

平成元年3月31日 発行

編集・発行 兵庫教育委員会

神戸市中央区下山手通5丁目10-1  
〒650 TEL(078)341-7711

印刷・製本 菱三印刷株式会社

神戸市兵庫区大開通2丁目2-11  
〒662 TEL(078)576-3961